

言葉をカタチに



K・悠・H
イラスト：透音

「よし、頑張るぞー！」

放課後、メールで呼び出されて向かった先は、葉留佳のために用意した家だった。いえ、既に「家族」のかしら。誰にも手を出させないこの場所に、今は私と葉留佳のふたりだけ。葉留佳は気合を入れて拳を掲げるほどやる気に満ち溢れているけど、私は逆に呆れるしかなかった。

「葉留佳、私はたったこれだけのために呼ばれたのかしら？」

「もちろん！」

「帰らせてもらうわ」

踵を返し、この場から離れようとしたところで、ガシッと腕を掴まれた。

「手伝う気ナシ!?」

「しらさら」

「微塵もですか!？」

「ああ、うっとうしいわね。私だって暇じゃないのよ」

「そりゃわかりますヨ。お姉ちゃんだって女の子だし、私にも知られたくないのは……うん、わかるヨ！」

「……何か勘違いしていない？」

私が忙しい理由は、単に雑務が溜まっているということ。

「してないよ。お姉ちゃんもチョコ作るんじゃないの?」

「してるじゃない……」

私はお菓子作りなんてしてる暇がないの。さっきだって、メールで新しい用件が舞い込

んで来たっていうのに……。

葉留佳は依然として掴んだ腕を放そうとしない。仕方なく向き会すと、そこに映ったのは私が付き合っていることを確信しているような瞳。この瞳には弱い。グラツとくる。「なあに? 別にひとりでも平気でしょ? それとも手伝ってもらったものをあげるつもり? ハッ、笑っちゃおうわ」

「うぐっ、確かにそうだけど」

「なら決まりね」

拘束を解いて、いざ戻ろうとする前に、もう一度葉留佳をチラリ。ああ、ここで見たのが間違いだっただのかもしれないわ。目の前の葉留佳は、縫うように視線を私に向けていた。そして、根負けしたように私が一つため息をつくと、葉留佳の表情に明るさが戻ってくる。

「なんなのよ、その『結局頼み込めば何でもしてくれる扱いやすいお姉さんだナ』。これならもっと甘えてもよさそうかも』なんて言いたそうな顔は」

「いやいや、そんなコト思っていないですよ?」
どうかしら。その顔が如実に物語っていると

思うけれど。
カバンを椅子に立て掛け、制服が汚れないように備え付けのエプロンを着る。葉留佳とお揃いのエプロン。見た目だけなら仲の良い姉妹に見えるのかしら。

「お菓子作りくらい、ひとりでもできるでしょ」

「甘い! 佳奈多は甘いよ!」

「な、何よ。いきなりビックリするじゃない」

「好きな人に食べてほしいものには妥協できないんだよ!」

「……今まで納得のいったものを一度として食べさせてあげられた記憶があるのなら、その言葉はとも重みのあるものになったとは思うわね」

「うわーん、佳奈多がじめるーっ!」

「誰もいじめてなんかいないわよっ。人間性が悪いわね!」

仲違いをしていたときじゃあるまいし、誰が好んでするのですか。

それでも決して空気が悪くならないのは、こんな言い合いも楽しんでるから。

軽口を叩きながら話を進めるのは忘れない。本題がおざなりになってしまっただけは意味がないもの。

「葉留佳はどんなチョコを作ろうとしているの?」

「うーん、それなんだよネ。いまいちイメージがピンとこなくて。ほら、私ってシンプルよりもなんかこう……そう、サプライズ的なモノを期待してるのですヨ!」

「あなたが期待しても意味ないじゃない。渡される相手側の気持ちを考えなさいよ」

私は嫌よ。そんな小細工のされた物を受け取っても嬉しくなんてないわ。

「えー。それだと私が作る意味がないじゃん!」

「逆に言うけど、そんなことのために作るつ



もり?」

「あはは……そりゃー、少しは食べてほしいっていうのもあるわけですがー」

「だったらしつかりと作ってみなさい」

とりあえず目に付いた変な材料は端に退けていく。うわ、なんなのよこれ……ジン○スキャンカラ○ル? こんな混ぜられたら流石に同情せざるを得ないわよ。

そんな私の脳裏に、それでも苦笑しながら嬉しそうに受け取るひとりの男子生徒の姿が浮かんだ。彼なら脳裏の姿に重なった行動を取るのよね。そして、葉留佳も満更ではなくて……。

「協力する気が失せたわ」

「なんですとーっ!?」

「冗談よ」

六割本気だったけど。

「……本気度が随分高かったように、はるちは感じましたが?」

「気のせいよ」

鋭いわね、葉留佳のくせに。

「ほら、作るんでしょ? なにを作りたかったのか教えなさいよ。私に馴染みのあるようなものでもないんだし」

「あれ、そうなの?」

「デコレーション程度で使うのと、そのものを主役で惹き立たせるのでは全然違うわよ」

「ふーん……」

「つて、わかってないでしょ、あなた」

曖昧に首を傾げるその動作では、誰がどう

こんな調子でちゃんと作れるのかしら。

※

「チョコを溶かしたら次は冷やすのよ。上手くヘラで筋が残る程度よ。高くても低くてもいけないから注意しなさい」

「わかってますよー」

道具はどのチョコレートにも対応できるほどに揃っていた。そのため、道具集めなどに翻弄されることはなかったため、すぐに作業に移っていた。

私としては、拍子抜けするくらい葉留佳が起こすアクシデントもなく、製作は進んでいる。

結局、作ることになったチョコはボンボン。中に入れるチョコを別のチョコレートでコーティングする、ちよつとした手間がかかるものの。いつの間にか、端に退けていたチョコレート作りには不釣合いな材料が並べられている。

これを葉留佳が選んだ時点で、私は相手に訪れるだろう悲劇を察し、密かに同情していた。あくまで私は葉留佳のサポートで、葉留佳のしたいことに大きな口出しはできないもの。

「どうどう、これでいいかな?」

「ふうん……いいんじゃないかしら。次はそれを型に入れて冷やすのよ」

見ても理解したように見えない。

「やはは。そういう難しいのは全部おねえちゃんに任せますヨ」

「こういうときだけ妹ぶらないでほしいわ」ベタバタと甘えてくるのには慣れていない。学校でも必要以上なスキンシップには戸惑っている私。そんな私を知っているからか、プライベートな場面では大胆な葉留佳だ。何も考えてないで行動しているだけの気もするけど。

「作るのはどうするの? ストレートにハートマークでもかたどって送ってみる?」

変にこだわるより、シンプルなほうが色々有利なのよ。手間だってかからないし、気持ち伝えるのには十分なもの。ストレートで送るのも、ひとつのサプライズよ。

「んー……それはそれで、私が恥ずかしいなあ。もつと資料ない?」

「それくらい自分で用意しておきなさいよ。私だっていきなり呼び出されてあるわけが……」

言いかけて思い出す。

「ちよつと待ってなさい」

キッチンから離れ、自分のカバンから一冊の本を取り出す。昼休み、あーちゃん先輩から押し渡された雑誌だ。表紙には大きくバレンタイン特集と今を捉えていた。

こんな雑誌を渡されて手持ち無沙汰だったけれど、今だけは役に立つかもしれない。目次を見ると、果たしてチョコレートの種

「了解です、サー!」

「私は上司でもなんでもないわよ」

時折葉留佳らしい発言は出るものの、手元は真剣だ。いつもこんな態度ならいいのに、この子は他人の前ではこんな表情を見せようとしてない。本当、もつとないんだから。

「型全体に入るように、多めに入れなさい。端が欠けてたりしたらみつももないから」

「これくらい?」

「溢れるほど入れなくていいのよ。ほら、余分なのは傾けて取り出さない」

「もつとないな」

「そういう作り方なのよ。もちろん、無駄にしないやり方もあるだろうけど、ここにある道具じゃ無理ね」

「後は冷やせばいいかな?」

「そうね。それで中に入れて、再度コーティングしておしまいね」

思ったより時間を食わず終わらせられそうね。

しかし、冷やしている間もハプニングは起きず、この雰囲気慣れきっていたせいか、葉留佳の突然な問いかけにすぐ応じることができなかった。

「お姉ちゃんは理樹くんにあげないの?」

「な……なな、なんで」

どうしてこんなときにあの男の話になるのよ。いえ、こういうときだからこそ、かしら。「お姉ちゃんも世話になったし、仲のいい男の子って理樹くん以外にいないでしょ?」

類と、その作り方のページがあった。本格的に作るわけでもない。こんな俗物な雑誌でいいでしょ。それにしても、意外と種類があるのね。材料なんてどれも似たような量と種類なのに、見栄えが変わるだけで、こんなにあるなんて……私には縁のない世界のようなわ。

「これでも見て決めなさい」

「ほえ? おおー、お姉ちゃんが雑誌を買ったー!?」

「そんなに珍しい? でも、残念。これはあーちゃん先輩に押し付けられたものよ。自分では買っていないわ。読むのもこれが初めて」

「なーんだ。つまらないのー」

そんなところに面白みを求めようとするんじゃないわよ。こつちはいい迷惑なんだから。

一応、葉留佳にも女の子という自覚はあるみたいで、雑誌を渡した途端、特集のページに目が釘付け。

「うわー、どでかおっぱいだー」

「どこ見てんのよ」

前言撤回。この子は少しは真面目にやりとりしてくれないのかしら。

「そんな怪しいページ見てないで、早く作るの決めなさい」

「……」

「人の胸見て、なにを考えているか知らないけど、殴るわよ?」

冗談抜きで言った言葉は、漸く葉留佳の注意を元に戻せた。はあ……後先が不安だわ。

「前者はともかく後者について、何でそう思ってるかは後々面白い質すと……」

確かに彼には色々世話になった。それは私自身否定することはできない。

「好きなんでしょ、理樹くんのこと」

「……そろそろ冷めるわよ。ほら、早く準備しなさい」

「む、逃げたな」

「逃げてないわよ。答える必要がないもの」妹の恋路を邪魔しようとは思わないもの。私はあなたがいてくれればそれでいいんだから。

それに、もしあげたとして、変に誤解されるのも気分が悪いじゃない。

キッチンで一生懸命チョコを作っている妹の姿を見たら、とてもじゃないけど争おうなんて思えないのよ。私はもう競うことに意義を見出せないんだから。

「おおー、見て見てー。上手く出来たと思わない?」

「そうね。初めて作ったようには見えないわね。雑だけど」

「こ、こういうときくらい手放しに褒めてほしいものなだけ……」

「冗談よ。良く出来てるわ」

もし、これを拒否するようなことがあれば、私は間違いない直枝を糾弾するだろう。しかし、恋騒動には何も口を挟めないのは口惜しいわね。そこまでは強制できないのだから。「……つて、なにこの色は?」



葉留佳が最後のコーディングをする前に覗かせてもらったものの中に、明らかにおかしい色が混ざっていた。

中身が色々用意されていたのは知っていたけれど、どう見てもおかしいのが数多く。チョコって赤かったかしら？

「ああ、それは唐辛子爆弾ですよ」

「……いつの間に。調味料は盲点だったわ。食べてみる？」

「食べないわよ。というか、直枝にあげるつもりなら、それは抜いておきなさいよ」

「なんで？」

「なんでって……さすがにバレンタインにそれはないんじゃないかしら」

「ダイジョブ、ダイジョブ。理樹くんだし」

理由になつてないわよ。

結局、変なチョコの出来上がり。これなら拒んでも……いえ、ダメね。渡されたものは全部食べなきゃ失礼ね。

他にも緑色やチョコにしては濃すぎる黒色なんていうのも見えたけれど、気にしないほうがいいのかしら。

「はあ……まともなチョコを作ればいいのに、あなたって子は」

「それじゃつまらないもん。で、お姉ちゃんは本当にあげないの？」

「ええ、直枝にあげる気なんてないわよ。作ってもいないし、買ってもないわ」

「つまらないな。姉妹で渡して『姉と妹、好きなほうを選んで！』的な展開がほしかったわ」

たのに」

「するわけないでしょ」

そんな道化はうんざりするほど演じてきたのに。

※

葉留佳と私はそのまま家に泊まることになった。

夜も更けた頃、ひとり目が覚めた。甘い匂いがこの部屋にまで漂ってきて、胸焼けを起こしたみたいになっている。

「……よく寝ていられるわね」

私なんて何度か起きてはこの空気に辟易しているというのに。

今回の目覚めは、運悪くすぐに寝付けるようなものではなく、眠気は去ってしまっている。

階下に降りると匂いは強くなり、もう寝る気分ではなくなった。

「…チョコ、ねえ」

材料は余っている。このまま腐らせてももったいない。誰にあげるわけでもないけれど、使ってしまったおう。

余っていたチョコを切り崩し、湯煎して溶かして型に流し込む。たったそれだけの作業。チョコに少しだけ味を加える程度の手しか加えていない。

チョコを冷やしている間の暇な時間は、昼のように葉留佳が起きていてるわけでもないの

※

早朝の寮は閑静が支配している。それもあと少し時間が過ぎれば喧騒が支配するようになるのよね。

慌しく寮から駆け出てくるのは見るからに運動部員。朝から苦労様なこと。私はただ、竹刀に鬱憤を積めて振っていただけ。彼らとは違う。

「お腹空いたわね」

部員による最初の混雑も収まったでしょうし、部屋に戻る前に食事にしようかしら。ところが、そんな心中の私の背中にかげられたのは聞き覚えのある声。

「よしよつと……って、そこにいるのは二木か？」

「誰？ ……棗先輩？」

「珍しいな、こんな時間に」

「あなたこそ、塀を乗り越えて何をしてるんですか？ また悪巧みなら……そうではないようですね」

棗先輩の服はそれこそ木の葉や泥で汚れていたけれど、スーツだった。

「まあな。確かに遊びもいいが、こっちもそれだけに集中できる立場じゃないんだ」

「就職活動ですか。棗先輩なら進学してもいいでしょうに」

「一時は考えたけどな。今は進学にそこまで未練はないさ」

「そうですか」

で、勉強するか雑誌を見るかだけ。けれど、予習は就寝前に終わらせてしまっていたし、仕方なく後者だけに。

雑誌はメインのバレンタイン特集が大半を占めていたけど、それ以外に女性なら興味を引く内容も載っている。葉留佳が見ていたのは、誇大広告のような見てて嘘くさい広告記事。こんなことで胸が大きくなるはずもないのに。

『渡されてうれしいシチュエーション』こんなことまでアンケート取って。役に立つのかしら。『放課後、屋上で告白と一緒に……』今時、学校の屋上が開いているなんてことはないわね。本当に理想で、こういうのはありえないと思ってるからこそ出てくる答えなのかもしれないわね。

1ページ中の文字数は少ないから捲るスピードは速い。イメージはそこまで目に留める物はなく、ファッションも気にしたことがないからわからない。

これだけの冊子の中に、興味を引くものはなかった。どれほど感性がズレているか……まあ、仕方のないことなのだけれど。

冷え切ったチョコを型から外し、余っていた包材でラッピング。見た目はそれなり。けれど中のチョコは無愛想なチョコの塊。

『お姉ちゃんは理樹くんにあげないの？』

葉留佳の言葉が思い出される。こんな市販のチョコにも負ける物を貰って嬉しがるような奇特な男なんていないわ。そうだとハッキリ

棗先輩の顔色を窺うと、確かに嘘はついていないように思える。いつも一緒にいるように見えるけれど、彼には何かがあったのかも知れない。

「お小言ですけど、帰り道でももう少し身だしなみは整えたほうがいいですよ。もう社会人になるんですから」

「知ってたのか？」

肩や袖に付いていた木の葉や泥を払ってその場で整える。目立つ汚れはそれで取りきれたらしく、違和感はそのほどない。

「小耳に挟んだ程度です」

「三枚辺りだろう？」

「ご想像にお任せします」

彼らの周りにいると、いやでも耳に入ってくるんです。それでも、知り合いの進路が決まることに反発を抱くことはなく、私は自然と棗先輩に祝いの言葉を贈っていた。

「就職、おめでとーございます」

「……変な気分だな。今まで散々お小言貰ってきた相手から言われるっていうのは」

「だったら態度を改めればいいんです。そうすれば、他の人からも言われるようになりますよ」

棗先輩の気持はそれほどだ。今日はこの人を狙っている女子は多いんじゃないだろう。まあ、私には関係ないことね。

「そうそう、これをどうぞ」

残っている小包のひとつを放り投げる。慌てた様子もなく受け取る辺り、さすがといっ

り断言できる。私自身、これには何も心を動かされないのだから。

ラッピングできたのは5個分。渡すアテがあるわけでもないのに、どうしてこんなに作っているのかしらね。作ってしまったからには誰かにあげてしまうしかない。

とりあえず、最初に渡す相手は決まっている。

「ま……ぶしー」

既に日が昇り始めている時間、カーテンの隙間から漏れる光が葉留佳の睡眠を妨げていた。しっかりと閉めて隙間を塞ぐと、葉留佳の寝言は収まった。

「少しくらい気づいてもいいのに」

こんなんじゃ、寝込みを襲われても文句は言えないわよ。

ラッピングしたチョコを枕元に置いてあげても気づかない。隣に置かれている目覚まし時計はアラームがオフになっていた。私に起こされるのを期待しているのかしら。

「……ごめんなさい。恥ずかしいのよ」

こんなイベント、あなたと楽しめるとは思ってなかったから。葉留佳の解かれた髪を手で梳く。同じ色の、姉妹の証。

「ちゃんと起きなさいよ」

「……んみい」

返事か、それともくすぐったくて漏れた寝言か。どちらでもかまわない。私は独り、この子を残して先に家を出た。



たところ。

「……おまえが俺に?」

「義理ですから」

「だろうな」

今日が何の日か、それは知っていたらしい。

「理樹にはあげるのか?」

「……は?」

思わず呆けた言葉が口から漏れた。そんな質問、予期してるわけがない。途端に鼓動が激しくなる心。

すうー、はあー……すうー、はあー……。

「い、いきなり何を言い出すんですか?」

深呼吸をして心を落ち着かせる。言葉に少し混じった動揺には気づかれなかったかしら。

「俺が貰ったのに、理樹が貰えないなんて変だろ?」

「変でもなんでもないと思いますけど?」

「そうか?」

「そうです」

これ以上話していると、ボロが出そう。さすが直枝が尊敬してるだけのことはあるわ。

切り上げて、彼に背を向けた私に、しかし

追い討ちの一言。

「別に俺はいいと思うぜ?」

「何がです? ハッキリ言ってください」

「遠慮なんてする必要がないってことだ」

「……人の心に土足で踏み入ろうとしないでほしいですね」

「二本次第だ。これはありがたく受け取っと

われるのはここまで恥ずかしいことだったかしら。

「かなちゃんってば、何か作っても自分と三枝さんで食べちゃって全然分けてくれないんだもん」

「わがまま言わないでください。追い出しますよ?」

「くれたら静かにするわよ」

「子供ですか」

あーちゃん先輩は椅子の背を抱き、梃子でも動かない格好を見せる。

「……わかりましたから、黙っててください」

まだ残っていた袋の片方を机の隅に置く。

「ここで食べない、騒がない、寝ない、邪魔しない。守ってくださいね」

「寝てもダメなの?」

「いびきが邪魔です」

「かなちゃんひどっ!」

「冗談です」

あーちゃん先輩は満面の笑みで袋を手にとる。そんなに嬉しいものなのかしら。三種三様、それぞれ見たけれど、どれも共通するのが笑顔だった。

※

日が暮れる頃にはあーちゃん先輩は退室していた。気づけば独りになっていた。

「……いつものことよ」

今日も彼らは騒がしかったのかしら。聞き

くぜ。疲れてるときには甘いものをつてな
人の心をかき乱しておきながら、逃げ道を与えず、そして自分から去っていく。私は彼が苦手だ。そう感じた。

※

「お、かなちゃん今日も早いねー」

「かなちゃんはやめてくださいと言ったはずです。それに、どうしてここにいるんですか。部外者は立ち入り禁止ですよ、あーちゃん先輩」

「そりゃ、かなちゃんに会いたいからに決まってるじゃない」

「はあ……そうですか」

放課後、いつものように寮長室へ赴けば、もう自宅学習期間に入っている最上級生の姿。

「試験、まだなんですから勉強したらどうです?」

「大丈夫大丈夫。なんとかなるから」

「そう言って後悔する人が大半です」

「私はその例外ってことで」

どうあってもここから立ち去ろうとしないらしい。いつものことなので慣れきってしまいい、困ったことはないからいいのだけれど。

差し当たり、重要な案件がないので、いてもらっても一向に構わなかった。それがわ

かっているからか、あーちゃん先輩は未だに我が物顔で備え付けのお茶とお茶受けを堪能

覚えのある風紀委員の子たちの怒声が聞こえてきてたし、そうかもしれない。

今日の業務に使った用具を片付けていると、机の端に一枚のメモ用紙を見つけた。

『美味しかったわよ。ごちそうさま』

「……これくらいなら、言葉で伝えてくれてもかまわないのに」

もしそうなると私は真っ赤になって反論したかもしれない。邪魔をしない、という決まりを守ってくれたのかもしれない。

とりあえず、この紙はクズ入れには向かわず、私のポケット行きになった。

部活動も終わっているのか、学内は静けさを取り戻していた。そんな中、独り寮長室で机に向かっていた。

そういうえば、今日はまだ彼は顔を出していない。きつと周りの女子に取り囲まれてるんでしょうね。それこそ葉留佳もその一員かもしれない。

「どうしようかしら」

余った最後の一袋、けれど捨てる気も食べる気も起さない。お手玉のように宙に放つては手の中に戻ってくる。

「あれ……佳奈多さん?」

「な、直枝?」

ドアが開かれた音がしたと思ったら、ついぞ先ほど脳裏に浮かんだ人物がそこにいた。

慌てて手の中の物をカバンに入れて隠した。何で私は隠したんだろうか。別に疚しいことでもないというのに。

していた。

「やっぱり美味しいわねー」

「食べ過ぎないでください。タダじゃないんですから」

「わかっているってば」

毎回クドリヤフカが持ってきてくれる嗜好品は私のお気に入り、それは凶らずもあーちゃん先輩のお気に入りでもあり、消耗は早い。

邪魔するわけでもなく置かれたお茶とお茶請けを私も頂いた。うん、やっぱり美味しい。最近の唯一の安らぎと言ってもいいかもしれない。

「そういえば、聞いたわよー。なんでもチョコ、あげたそうじゃない?」

「……誰がそんなことを?」

もしかして、今朝のことを見られていた?

もしそうなら、面倒なことになる。そんな気は毛頭ないのに。

「三枝さんと能美さんからよ。ふたりとも羨ましいなー。いいなー」

けれど、あーちゃん先輩の言葉は最悪の予想の範疇ではなかった。なるほど、確かにふたりにも渡していた。葉留佳には寝ているとき、クドリヤフカには寮に戻ったとき。

葉留佳には煩いくらいに問い詰められたけれど、最後の一言の「ありがと」だけで作ってよかったと思えた。クドリヤフカも無骨な物なのに美味しいって言ってくれた。嬉しいけれど、恥ずかしかったわね。美味しいと言

「今更どうしたの? 今日はもう終わっているわよ」

「うん、ごめんね。本当はもっと早く来たかったんだけど……」

「どうせ彼女たちに追い回されていたんでしょう?」

「佳奈多さんってエスパー!?!」

「あなたの周りを知っていたら、誰でも思ふことよ」

「あ、あはは……そうだよね」

話が途切れると、静寂が舞い戻る。直枝の手にはラッピンクされた箱がいくつか。

「随分と貰えたのね」

「僕だけじゃないよ。謙吾や真人だって同じくらい貰ってるよ」

慌てたように弁解を始める。何で慌てているのか見当も付かない。私とは関係がないはずなのに。チクリ、と胸を刺す小さな痛み。そう、関係なんてないのに。

でも、直枝がチョコを貰っているという事実が、何故か私の心を騒が立てる。心のイライラが募ってくる。

「どうしてここに来たのかしら? 手荷物持ってくるような場所ではないでしょう?」

それを隠そうとしても、言葉に乗って表れてしまう。直枝を前にすると、仕方がないこと。なんでかはわからないけれど。

「そうなんだけど……佳奈多さんの顔を見たかったし」

「はっ、ご機嫌とりのつもり?」



「そんなことないよっ」
「どうか。そんなの抱えてくるなんて、人の神経を逆撫でしてるようにしか見えないわ」

「あ、待ってよ、佳奈多さん！」
片付けも終わっていたのでひとり先に部屋から抜け出す。鍵を開ける時間も惜しかった。そんな私の後を追ってくるのは当然とばかりに、すぐに開めたドアが開かれた。

「ごめん、気に障ったのなら謝るよ！」
「……謝ってもらうことでもないわよ」
その手にはもう何も抱えられてなかった。それだけで、私の心は穏やかになりつつあった。なんて……現金な心。

「でも、佳奈多さんを怒らせちゃったのは事実だから」

「……気にしないでいいわよ。ほら、帰りましょう。あなた、あそこに置きっぱなしにするつもり？」

「あ、うん。先に行ったりは……」
「しないわよ。そこまで意地の悪い人に見えるのかしら。心外ね」

そう呟くと、急いで部屋の中に戻って一分もしないうちに出てきた。手には先ほどの心を波立たせたチョコの数々。けれど、今回は落ちて着けた。それでも、見た目はイライラするけど。

「改めてみると、たくさんあるわね」

「ま、まあね」
「そんなにモテてるのね、あなた」

かりと……って、私は何を考えたの。そんなこと、考える必要なんてないのに。

やはり、直枝は私の心を揺り動かす存在だ。昔も、そしてこうしている今も、こんな簡単に私の心を揺さぶるなんて。

「お返し、期待しててね」

「……そう、三倍返して期待しておくわ」
「って、そういう言葉は知ってるんだ!？」

人を弄んだ代償よ。軽くつくじゃない。

毎年平日と代わり映えのしなかったこの日は、今年は気疲れの多い一日になった。その中に、少しの嬉しさを含みながら。

このまま寮に戻ったら何か言われるかしら。きつと、彼女たちは待っているに違いない。

「そうそう、直枝」

「どうしたの?」

「なんとか逃げ切ってみるのね。余韻に浸るのはその後よ」

「え……?」

ああ、そうね。少しくらい驚かせてもいいかもしれない。自分だけがペースを乱されるのはいやなもの。

視認出来たのは予想通りの人物だった。直枝も見つけたのか、方向転換して駆け出した。そしてひとりになる。

そんな私が呟いた言葉は、

「……ハッピーバレンタイン」

大好きな人と、お世話になった人へ。

「いやいやいや、そうとは限らないよ。義理だろうしね」

「……そうなの? 葉留佳のは食べたの?」
「うっ……思いつきでほしかったかも」

どうやら例の物をそのまま渡したらしい。あの子らしいといえればあの子らしいわね。見た目はチョコらしいのに、食べたら別物。そのときの直枝の表情が容易く思い浮かぶ。

「ふっ」

「もう、笑わないですよ。ひどいなあ……」
「ごめんさい。あまりにもあの子らしかったから」

きつと、渡すときなんて顔が真っ赤になってたんじゃないかしら。それで、慌てながら嘘で義理なんて言ったり。それを見抜けない直枝も直枝だけれど。

「ほら、これ」

「え?」
相手のほうを見ず、山になっているチョコのさらに上に、無愛想な袋を投げる。

「これは……チョコ? 佳奈多さんが?」

「悪い? 何よ、その表情は。まるで『私みたいな素っ気無し、愛想無し、配慮無しな無し無し女が今頃流行に乗って。でも女の子から貰えるのは一応数に入るから別にいいかな』。味のほうは……まあ期待しないでおう」と言いたそうね」

「いやいやいやいや、誰もそんなこと思ってませんから」

「そう。あ、それ義理だから。変な勘違い起こさないでよ」

これだけは口うるさく言っておかないと。変な噂立てられても困る。

「うん……やっぱり義理なんだ」

「何か言った?」

「いやいや、なんでもないよっ。うん、ありがとう、佳奈多さん」

「……っ。こんなものにお礼するなんて、変わったるわよ、直枝」

「それでも嬉しかったから」

「……ふんっ」

そんな単純な言葉で動揺するなんて、本当……私は弱くなった。けれど、不思議と嫌悪感は抱かない。何故なのだろう。結局、直枝にもチョコをあげて、決意した意思は弱くなっている。罪悪感がこみ上げてくる。だけど、小さかった。……って、

「なっ……なんでここで開けてるのよ!」

「モグモグ……」

何も本人がいる前で食べなくてもいいでしょうに。

「うん、美味しいよ」

「……っ。そう、よかったわね」

「こんな美味しいの食べたの初めてだよ」

「よっぽど食生活が悪かったのかしら」

「そういうわけじゃないんだけどなあ……」

そうとしか聞こえないのよ。ただ市販のチョコを溶かして固めただけのをありがたがらないでほしい。こんなことなら、もっとしっ

チョコにくびっだけ!

朱鷺

えっ? 聞いてない?
それはゴメンね?
とにかく、僕はこの日を一生忘れないだろう。
後日、聞いた話だけこの事件の事を『チョコ奴隷の果て……』と呼ばれていたらしい……。

先ほど話したように僕たちはいつも通りに上履きを履こうとした時だった。
「さて、謙吾っちはどんだけチョコが入ってるかな?」
今回の事件の被害者の真人が謙吾にそう言った。

ちなみに恭介は1週間前に『俺は旅に出る……!』とか言っこの学校から姿を消した。卒業式までには帰ってくるらしい。
今頃どこ行ってるんだらう?

「さあな……」
謙吾が上履きのロッカーを開けると漫画みたいにドサドサとチョコが落ちてきた。

「……」
「あいかわらず、すごいな」
「そうだね……」
僕たちは思わず絶句してしまう。
わかってはいたけどそのチョコの量を見るとなんだか胸焼けしそうだ。

「……こんなには食べられないな。真人手伝ってくれないか?」
謙吾は毎年の様に真人をお願いをした。
「……」

しかし、さつきから真人の反応がない。
なにやら真人は固まっていたようだ。

「おい、真人どうしたんだ?」
謙吾が真人に近づく。
「……マジか?」
謙吾も固まってしまった。

「どうしたんだ?」
鈴は気になってふたりに近づいた。
「うわっ、こわ! なんだこれ!? くちやくちゃ、こわいぞ!!」

鈴は固まらなかったが驚いている。
「どれどれ……」
僕も気になって見てみる。

「……ウソだ」
それはもう、あの、なんと言うか完璧にあれだね?
もしかしたらと思うけどあれしかないよね?
ね?
なんか、もう見たまんまだけどあれだよ
ね?

「……いやっ………ほ………!!!」
真人がいきなり叫びだすとそりやもう体操選手顔負けの体操競技のゆかをやって見せた!

その前にここコンクリートだよ!
「おはよう、来ヶ谷さん」
「うむ、おはよう理樹くん」
目が『で、あれは一体なんだ?』と語っていたから僕はさっきの事を説明しておいた。
忘れる前に言っておくけど手紙の内容はこう書かれていた。
『今日の一時間目の休み時間に裏庭に来て』と。
「なるほど、だからあれほどまでに有頂天か」
「うん、でも一体誰だろう?」
「これはお姉さんでもわからないな」
「やつぱり?」
さすがに来ヶ谷さんでもわからないみたいだ。
「しかし、物好きもいたもんだな。あの真人少年が好きな人間がいたとは……」
来ヶ谷さんの気持ちがよくわかる。
「謙吾少年ではなく真人少年……、ええ! 真人少年だど!?」
「気付いてなかったんだ!?」
これは僕もビックリである。
「てっきり、謙吾少年だと思っていたのだが……」
「謙吾があれば有頂天になるはずないでしょ?」
「それは確かに……」
まだ、来ヶ谷さんはブツブツと言っている。
後ろの方では剛○波!とか、○突零式!!とか聞こえてくるけど気にしない。
「おっと、忘れる前に渡しておこう。はい、

僕はいつものように友達と会ってご飯を済まして上履きを履こうとする。

その時、事件は始まっていた。
なにげなく? さりげなく? 僕の友人、真人が被害を喰らうことになった。

それまではいつも通りだったのに……。
ただ、今日はいつもと違う日だった。
そうバレンタイン、女の子がチョコを渡す日なのだ。

もちろん、それを期待する男も少なくない。
ちなみに僕は彼女持ち。
知っているとおり鈴なただけど。
へへっ。

「ハイハイへ——イ!!」

まだ、真人の暴走は止まらない!
あの筋肉の塊が四方八方動き回っているのだから邪魔という以外でのなにもでもない。

……真人、そんなに俊敏だったんだ。
「うっとうしいだろ!」
メキヤツ!!
鈴のハイキックが真人の首に入る!

……嫌な音したなあ。
「ぐふっ!」
真人の首が変な方向に向いていた。
そして、そのまま倒れこむ。

「鈴、ちよっとやりすぎじゃないかな?」
「……ちよっとやりすぎた」
鈴は非を認めていた。

ああ、あの鈴がここまで成長したんだなあ……。
「どうした? 理樹、ちよっとこわいぞ?」
「ごめん。いろいろと考えてた」
「そうか、ちよっとしんばいした」

僕、どんな顔をしていたんだらう?
「全然、きか——ん!」
いきなり、真人が立ち上がる!
首は変な方向に向いたままで。

「真人、それ痛くないの?」
僕はそう聞いてみた。
「ふっ、めちゃくちゃ痛いに決まってるじゃねえか理樹」

「あれが、精神が肉体を凌駕すると言うやつ痛かったんだ!

か!!」

「謙吾、それ何か違うから! ここ明治じゃないよ!」
「むう、違ったか……」
合つてほしくないからさ……。

「あれを見てしまったら誰だつて、ヒゲのオジサンだつて無敵だぜ?」
「いやいやいや、あれは敵の攻撃も無敵だけ……、真人は普通に効いてたよね?」
「……こまけえ事、気にするな理樹」

「……うん、ゴメン」
触れちゃダメだったんだね真人。
「しかし、まだまだ暴れ足り——ん!!」
また、ゆかを始める。

「謙吾、真人を止めて!!」
正直、これ以上真人を暴れさせたらいろいろと面倒なことになる。

「おう、任せろ!」
謙吾はどこから持ってきたのかわからないけど竹刀を出す。
「俺の○突を受けてみるがいい!」

「謙吾っちよう、YOU ARE SHOCK!」
ものを教えてやるよ……」
ふたりは睨みあい、正面からぶつかり合う。

「ぬおおおおおお!」
「でええええりやあああ!!」
激突!!
ふたりの戦いが今始まる!

「朝から騒々しいぞ?」
後ろから来ヶ谷さんがやって来る。

は純粹に嬉しかった。

「んじゃ、行ってくる」

「うん、頑張ってるね」

「おう」

そのまま中庭の目印である芝生の所へ歩き出す。

僕はそれをじっと見ていた。

所々に人影があるのを見つける。

彼女たちも見ているのだろう。

だが、違和感がそこにあった。

いつまで経っても人が来ないじゃないか！

真人を見る。

真人はその大きな体を木の下に手を伸ばす。

どうやら、何かあったらしい。

僕は真人に近づく。

「どうしたのさ真人？」

「理樹、なんか手紙がここに置いてあつてよ」

「どれ？」

また、便箋がそこに置いてあつた。

「とりあえず中身を見てみようよ」

「そうだな」

真人はピリツと便箋の封を開けて中の手紙を読み始める。

「理樹、これを見くれ」

「ん？」

真人に手紙を渡されて僕も読み始める。

『宮沢謙吾の竹刀を奪って』

なんでこんな事を書くのだろう？

明らかに怪しい。

謙吾に恨みを持つ人なのだろうか？

「単なる悪戯か、私たちに恨みを持つ嫌がらせかだ」

前者はまだわかるが後者は全く持つて考えていなかったことだ。

胸の中で黒いものが渦巻いてるような感覚を味わう。

「恐らく、後者の可能性は限りなく薄い」

「なんでさ？」

「後者の場合は女生徒に人気がある謙吾少年と頭は悪いが人当たりのいい真人少年にそんな事をする人物が少ないだろう？」

「そりゃそうだけど……」

僕はここで思い出す。

僕らのリーダーを……。

思い立った僕は恭介に電話をすることにした。

「理樹君、ケータイを出してどうするんだ？」

「恭介に電話するよ。こういう時は多いほうに限るから」

「それもそうだな……」

僕の耳にコール音が聞こえてくる。

「理樹、どうした？」

どうやら繋がったみたいだ。

「あつ、恭介！ あの今日こんな事が起きたんだけど……」

僕は恭介にさっきの説明をする。

「と言う訳なんだけど……」

『……その手紙は真人の所に入れてあつたのか？』

「うん、そうだよ？」

『わりい、理樹実はなそれは……』

僕にはそれがわからない。

「真人、やめようよ」

「理樹、これは謙吾も倒さねえとチヨコを貰う権利なんてないって言っているようだ」

「怪しすぎるでしょー」

「理樹、俺のハートはもう火がついてるんだ。誰にも俺を止められねえ」

真人、僕は忘れていたよ。

君が馬鹿だつて事を……。

「理樹、謙吾を探しに行こうぜ！」

「あつ、真人!!」

真人は校舎のほうに戻っていった。

「はあ……」

思わずため息をついてしまう。

また、ケータイのバイブがポケットの中で響く。

これは通話のバイブだ。

「はい？」

「もしもし、理樹君何があつた？」

電話の主は来ヶ谷さんだつた。

僕は先ほど起きたことを来ヶ谷さんに話す。

『そうか、その手紙を持って放送室に来てくれ』

「うん、わかつた」

プツツと電話の通話が切れる。

僕は放送室に向かうことにした。

放送室の扉を開くと皆が集まっていた。

「おお、理樹くんのお帰りですヨ」

「ただいま」

部屋を見渡すと彼女たちがお茶会をしていた。

言おうとした時電話のバックで爆音が耳に入った。

「恭介、一体どこにいるのさ!?!」

「おっと、奴さんが来たみたいだな。すまん

な理樹、これが終わった後に連絡を入れる」

今度は電話のバックに声が聞こえてくる。

『Hey,Natsumi GOI GOI GOI』

『OK ジョーンソン、武器はこれでいいんだな？ よし、行くぞー』

「ちよつ、恭介!!」

虚しいコール音だけがケータイに残る。

恭介、君はどこに行こうとしているの？

「理樹君、肝心の話の答えは聞いたのか？」

「ううん、残念ながら」

「そうか」

来ヶ谷さんはやっぱりつて顔をしている。

「……恭介さんはどこにいるのでしょうか？」

西園さんが言った言葉は誰にも言えなかつた。

「さて、休み時間もそろそろ終わりだ。次は昼休みにしよう」

「はーい、わかりました。ゆいちゃん」

「アイアイサー、姉御」

「いえす、あい、どうーなのです!」

「……わかりました」

「うみゆ、りよーかいした」

来ヶ谷さんの言葉で皆が後片付けを始めて教室へ帰る。

すると、来ヶ谷さんは僕の耳に口を近づけ小さい声でこう言った。

……昼休みじゃないのに。

「ツッコミは受け付けないぞ理樹君」

「そうですか……」

「さて、話を聞こうじゃないか」

来ヶ谷さんの言葉に反応したのは西園さんだけだつた。

ほかの皆はお茶会に忙しいみたい。

「……と言う訳なんだけど」

さっき起きたことを僕はふたりに話した。

「なるほど、それは確かに妙だな」

「でしょ？」

「他に文章はなかつたのですか？」

「残念ながらそれはなかつたよ」

「そうですか……」

沈黙。

僕は考える。

何故、謙吾の竹刀を奪わなきゃいけないのか。

何故、それがあたかも誘導されたかのよう

に真人なのか。

「だが、この文章を読むと別に真人少年以外の

人物でもOKみたいだな」

「確かに」

「ですが、宮沢さんを相手に出来るのは限られますよ?」

「それもそうだね」

うーん、相手は一体何がしたいのだろうか？

「考えると相手が何がしたいのかふたつに絞られる」

「ふたつ?」

僕は来ヶ谷さんに聞き返す。

「……理樹君、謙吾少年を呼ぶのは昼休みだ」

「うん、わかつた……」

僕は頷く。

ケータイを開いてさっきの事をメールで書いて謙吾に送る。

30秒もしない内にメールの返事が返ってきた

『わかつた、昼休み学校の裏庭で待つ』の一言だけケータイのディスプレイに映っていた

そのことを次の休み時間に真人に話した。

「おっしゃああああ!! 燃えて来た——

——!!」

真人が大きい雄たけびを上げた瞬間、鈴が

宙を舞う!

「めーわくだろー!」

「あれは私が教えた……」

「鈴に何を教えるのさ!?!」

そう、鈴はプロレス技のシャイニング・ウィザードを真人のこめかみに向けて放つていた!

しかも、それは来ヶ谷さんに教えてもらった

みたいだし……。

「ぬごふっ!」

どきやす!と何かが砕けた音が聞こえる様な気がした。

うん、気にしたら負けかな……。

「気にしろ!」

「うわあ、真人、頭から何かがはみ出てるよ

……?」

「ん? そうなのか?」

それを見た時、クラスの中でカオスな状況

に陥つた。

小穂さんは気絶するし、クドはオロオロしていたり。

西園さんは以外に大丈夫かなあと思っていたけど真剣な顔のまま気絶して保健室に運ばれていったし。

来ヶ谷さんはただ、笑っていたり。

いつの間にか教室に入ってきた葉留佳さんは青い顔をしていて……。

鈴はそんな真人を見てひたすら蹴り続けていてもう大変。

でも、数分後にはクラスの皆は気にしなくなっていた。

クラスメート曰く、『だって、いつもの事だし』だとか。

3時間目が始まるころに全快している。

真人の話だと『気合で直した』……って無理でしょ!!

真人、君は一体何者なのさ……。

そんなブチハブニングも過ぎ昼休みになる。

「よし、決戦だな!」

真人はいきなり立ち上がりカツ丼を下げてそのまま食堂を抜け出していった。

「もう、食べたの!」

僕は定食を食べて4分は経つけど真人は僕より遅かったのに……。

「む! 葉留佳君、直ちに追え!」

「ちよつ、姉御まだ蕎麦を食べてるから無理だつて!」

「なら、小穂く……は日直か!!」

「あの筋肉ダルマ食べるの速すぎ——!」

謙吾は懐から帯を取り出した。

「そいつは……、変身帯!」

「ほう、知っていたのか」

「ちよつと待ってよ! 変身帯ってなんなのさ?」

思わず僕は出てしまう。

と言うより、シリアスな場面だったのにいきなりネタだとは思わなかったから突っ込みずにはいらなかった。

「これは斉藤システムの適合者であれば使用できる特殊な帯だ」

謙吾は真面目な顔で言っているけどそのネタって平成ライダーの5作目だよな!?

「またの名をマスク・ザ・斉藤」Zブレイド」やっぱり!

「UMA~~~~~」

「何故に英語!」

人をやめたような気がするの僕だけだろうか?

「そんなの俺には通用しないぜ!」

真人がマスク・ザ・斉藤」Zブレイド……めんどくさいから謙吾でいいや。

真人が謙吾に向かって走り出す!

「うまうっ!」

あつ、日本語に戻ってる。

「のほっ!」

一瞬で真人の腹を竹刀で叩き込んだ!

「やるじゃねえか、これならどうだあ!」

真人の筋肉がモリッ、モリッと膨れ上がる。

「上肢体筋の八割を右の三角筋に集中!」

ふたりはジタバタしている。

真人の食べる速度が予想外だったんだね。後ろからズズッとお茶を啜る音が聞こえた。

「へいわだな」

「平和ですね……」

「お茶がおいしいのです!」

3人はのほほんとお茶を啜っていた。

……本当に平和だ。

「ごちそう様!」

僕は真人の後を追っかける。

「あ——! 理樹君に先を越された

「急いで食べる葉留佳君。私は放送室で待つ!」

「アイアイサー……って姉御も昆布茶飲んでないで急いでくださいヨ!」

「残念ながら私は一日一回昆布茶を飲まなければ死んでしまうのだよ」

「昨日、一回も飲んでないじゃん!」

「ええーい、うるさい! さっさと行かないと腸をぶちまけるぞ!」

「私の扱いヒドッ!!」

とか聞こえたり聞こえなかったり。

僕は学校の裏庭に辿り着く。

話し声が聞こえる。

「へっ、謙吾お前の最強伝説は今日で終わる。今日から俺が最強だ!」

「俺は最強になったつもりは毛頭ない。だが、貴様に二度も負けるのは癪だ!」

「謙吾が負けたらその竹刀を頂くぞ!」

うわあ、それしか言いようがないけど本日3回目言っちゃたなあ。

「完成! 筋肉戦車!!」

「なんだと? うまう——……」

「筋肉戦車、発進!」

真人は謙吾に向かって再び突進する。

「喰らうがいい! マスク流興義、数多の受験に不合格だったネルソンは最強で最高! 切り! 切り! はりやほれうまう~~~~!!」

ネルソンって誰さ!?

と言うかそのネルソンさんは受験にたくさん落ちたんだ!?

その前にマスクと全然関係ないよね!?

「俺の筋肉さんがああああああ……」

真人は数多の受験に不合格だったネルソンは最強で最高! 切り! を喰らって倒れた。ちなみに数多の受験に不合格だったネルソンは最強で最高! 切り! はただの超高速連続集中切りだけだ。

「この俺が、筋肉さんが負けるとは……」

「斉藤のマスクは無敵だったと言うわけさ。うまう」

斉藤のマスク、どんな素材なんだろう?

つか、それバトルランキング王者の僕の

じゃ……。

「謙吾、ちなみにそのマスクは何処に置いてあったの?」

「体育倉庫だ。うまう」

「そうなんだ。……いい加減はすしたら?」

危険な香りがプンプンするからはずしても

「俺が勝ったら……、そうだな勝ってから考えよう」

謙吾は竹刀を抜き、真人の前に立ちほだかる。

「今の俺は無敵だぜ? スポーツカーに足を轢かれても打撲で済んでしまうんだぜ?」

「それは凄いか、凄くないのかよくわからんな……」

確かに……。

「すこの六のうるせえ! さっさと始めるぞ!」

凄い間違え方だなあ。

「真人、四の五のだ」

「……四の五のうるせえ! さっさと始めるぞ!」

言い直した!?

「行くぜえええ!」

真人がストレートパンチを2、3発謙吾に向かって放つ。

謙吾はそれを最小限の動きでかわした。

かわした直後、竹刀を真人の腹に打ち込む。竹刀独特の音が聞こえた。

「俺の腹筋君をなめんよ!」

「無傷か……」

「お返しだ!」

もう一発、ストレートパンチを放つ。

「……チッ!」

反応が遅れてギリギリ回避した。

「へいへい、謙吾どうした?」

「止むを得ないな、こいつを使う事になるとは」

raitai.

「しかたがない、ほら」

謙吾は仮面をはずして素顔を見せる。

「そのマスク見して」

「ああ」

ん?

マスクの額の方にIIと書かれていた。

「体育倉庫に何故これが?」

「手紙を見たんだ。なんでも俺の竹刀を奪いに来るとか来ないとか書かれていた」

ナンダッテ!?

思わずカタカナ表記にしたけどもう一回。

何だつて!?

「謙吾、それいつもらったのさ。」

「わからん、旅に出るって言ったとき体育倉庫に置いてあった」

「マスクの事は?」

「校門の所だ」

なるほど、犯人は恐らくあの人か……。

何故、こんな事を?」

「理樹、わかると思うが犯人を多分よく知っている奴なんだが……」

「奇遇だね、僕もだよ。謙吾」

犯人は……

「恭介!」

僕と謙吾の声が一致した。

ちなみに真人は後ろでのびていた。

すぐさまケータイを開いて来ヶ谷さんと呼ぶ。

「来ヶ谷さん、さっきの話を聞いていると思

うけど恐らく犯人は……」

『ああ、葉留佳君に向かわせてマスクの事を聞いたから。多分、恭介氏だろう』

「直ぐに恭介に話をしないと」

『残念ながら電話は通じませんでした……』

いきなり西園さんが電話に出る。

『私が電話を出た理由は来ヶ谷さんが神北さん達にちよっかいをかけているからです』

来ヶ谷さん、あなたは何をしているのさ!!

「それじゃあ、放課後に恭介の部屋に行こう。何かあるかも知れない」

『わかりました。そう皆に伝えておきます……』

「うん、頼んだよ」

『はい、それでは……』

真人は立ち上がり、周りを見渡した。

「くそう、謙吾に負けちゃった!」

「真人、まだあきらめないの?」

「俺はあいつを倒すまでやるぜ。謙吾! 放課後、もう1回勝負だ!」

「悪いが真人、放課後はリトルバスターズ全員で恭介の部屋に行かなければならない」

謙吾はそう言った。

「そうなのか? 理樹」

「う、うん」

僕は頷くだけしか出来なかった。

「そうか、それが終わった後やるうぜ!!」

「ああ、いいぞ」

謙吾はあっさり承諾する。

「謙吾、いいの?」

小さい声で謙吾に聞く。

「ああ、さすがに真実を教えないとまた面倒だからな」

それは仕方ないことだと思う。

「よし、教室戻ろうぜ!」

真人がそう言って僕らは教室に戻る。

5、6時間目は何もおきずに授業が過ぎ放課後になった。

「さ、恭介の部屋に行こう」

こうして、僕らは恭介の部屋に向かった。

「さて、着いた訳だけ聞けるよ?」

もちろん鍵は同部屋の人から許可は頂いた。

中に入ると漫画が置きっぱなしだった。

恭介の机を見た時、ケータイが鳴る。

「誰のケータイだ?」

「ごめん、僕だ。もしもし」

『おう、理樹。こっちの用事は全終わったぜ』

「さっきの話を聞きたいんだけど……」

「ん? ああ、いいぜ」

恭介は承諾した。

『真人の下駄箱の中に手紙を入れたのは俺じゃない』

「じゃあ、誰なのさ」

『そいつはバイオ田中だ』

「なんで、あの人が?」

なんで、バイオ田中さんが出てくるのだから?」

う?

『これも知らないとなると……、理樹俺の机の上を見てくれ』

「わかった」

僕はひとつの便箋を手を取った。

「この白い便箋?」

『ああ、それに全てが書かれている』

僕は便箋を開けて手紙を取り出し読み始める。

この手紙をリトルバスターズの誰かが、恐らく理樹が読んでいたのであれば俺はこの学校にいないだろう。

この手紙を書いたのは紛れもないこの俺、棗恭介が書いた。なぜ、これを書いたかと言うと最近、バトルランキングの変動があまりにもないからだ。

しかし、そう言ったところで俺は学校にいないから無理やりやらすことも出来ない。ならどうすればいいか考えてみた。

バレンタインが近いからこれを利用してバトルを勃発してみようと思ったんだ。俺はバイオ田中に頼んで真人の下駄箱の中に手紙を一通、謙吾の中に一通、理樹の中にこれを書いてもらうことにした。

理樹が立会人になった上で謙吾と真人のバトルを開始してほしいと思った。それを見て他の奴らがやる気になってくれることを願う。

では、今日も元気にバトルしてもらいたい。

棗恭介

『と言う訳なんだが……、これを見ていないとなるとこれは入っていないかったみたいだな』

後は頼んだぜ、理樹。と言って電話を切ったおかげで少しだけ思考が回復した。

つて恭介逃げた!

しかし、……声が出ない。

呆然と沈黙、これが一番相応しい表現だと思っ。

真人を見るとどんどん俯き体育座りをしていじけていた。

その大きな背中からは哀愁以外、何も出てこなかった。

「……あゝ、これは不幸な事故だね」

これが今の僕に出来る精一杯のフォローだ。

「そ、そうだぞ? 真人、ほらきんにく、きんにく〜」

謙吾も苦笑いでフォローをする。

「真人君、笑うんだ!」

来ヶ谷さん、それは無茶だから!

「真人君、こついう日もあるよ〜」

「そうですよ、井ノ原さん!」

小毬さんもクドも必死にフォローをしている。

「落ち込む井ノ原、慰める直枝、これは以外にいけません……!」

「西園さん、それはやめて!」

それは嫌だ、男で絡むのは絶対嫌だ!

「真人くん、ドンマイですよ」

「そうだ、真人きつといい日もあるさ」

あの鈴が慰めてるほどの真人の落ち込みっぷりは凄いと思う。

いきなり、鈴が手をポンと叩くとポケット

からひとつの箱を取り出した。

「今、バレンタインって思い出したんだが受け取れ理樹、本命チョコだ」

……やっぱり、空気は読めていなかった。

頬を赤らめて言ってるから可愛いんだけど。

……さらに沈黙。

とりあえず僕はどう言っと思った。

「あ、ありがとう」

それに皆に火をつけたのか僕にチョコを渡してきた!

なんで!?

「リ、リキ、私のも受け取ってほしいです!」

「わ、私も〜!」

「しょうがないなあゝ、理樹くんの為に作ったから受け取ってね!」

「作りましたので受け取ってください……」

「はっはっは、モテモテだな理樹君」

笑い事じゃないよおとおお!

急に真人は立ち上がった。

「おい、お、俺にちよ、チョコは?」

……三度沈黙。

「ごめんねゝ、真人君作る暇がなくて……」

さすがの小毬さんもこれには苦笑いしかなかった。

「クー公は?」

「ごめんさい、井ノ原さん」

「西園は?」

「ひとり分で精一杯でした……」

「三枝は?」

「私もひとり分精一杯でしたヨ。やはは」

「来ヶ谷の姉御は?」

「すまんが私はひとつも作っていない」

この人しれっと嘘をついた!

「り、鈴は? 俺たち幼馴染だよな?」

「すまんが作っていないぞ?」

「そ、そうか……」

真人はまだいじけ始める。

「あつ、真人これがあるぞ?」

「なんだ!?!」

「受け取れ」

真人の手のひらに置いたもの。

それは……。

「ご、五円チョコ」

だった。

本日、四回目の沈黙。

「……皆、外に出ようか?」

その一言で僕らは外に出た。

部屋には真人だけが残る。

寮の出口に来て皆と分かれた。

寮の方から何かが聞こえてきた。

「こんな、世の中嫌だああああああああああああああああああ!!!」

「……哀れだな」

「そうだね……」

その晩に他の寮生に話を聞くとその声は寮に住んでいる人たちがすべて聞いたみたい。

そして、次の日から真人はチョコを食べられなくなったり、ならなかったり。

バレンタイン。 パスターズ!

あおめ

仲間達はこぞって食事に飛びついて争奪戦を繰り広げている。まったく現金な連中である。

少し落ち着いてから私も食事に口をつける。うむ、なかなかの美味だ。

「おいドルジ、まだ食うのか? いい加減ダイエットしろ!」

「ぬおー」

鈴様の制止などお構いなしで早くもら杯目のドルジ殿。しかし、それはいつものことなので気にせず食事を続けることとする。

その時、ふっと別の人間の気配が我輩の鼻を掠めた。

「おや、鈴君じゃないか」

「っ!」

主君の背後から聞こえた声に鈴様を含め我々(ドルジ殿を除く)は警戒態勢を取る。

おや、あの女子は……確か来ヶ谷唯湖とあったか。昼に散歩していると良く目撃するが特に危険な人物ではない……ように思う。「こんなところでなにをしているんだ?」

「う、うっさい、あっちいけ!」

「……ほう、猫の世話をしていたのか」

「っ!?」

な、何と……確かに最初我々から五間ほど離れた位置にいたはずだが、一瞬で横に来るとは……前言を撤回させて頂こう、こやつ只者ではない。

「鈴君は本当に猫が好きなんだな」

「ち、違う、こいつらが勝手にしてくるだ

けだ!」

「はっはっは」

何やら慌てている鈴様。うぬう、ここはとりあえず引っ掻いてみるか。

「にゃーっ!」

と思った矢先、すでに仲間の一匹が飛びかかっていた。が、その一撃もむなしく空を切る。ああ世は無情なり。

「ふむ、猫にも好かれているようじゃないか」

「ふかーっ!」

こやつ、鈴様が髪を逆立てて威嚇しても全く動じないとは……。

「ふむ、ところで鈴君。君はバレンタインの準備はしないのか?」

「……バレンタイン?」

「おや、知らないのか? 女の子の一大イベントだぞ?」

「知らん、というか興味がない」

「ほう、ならばおねーさんがいいことを教えてやろう。バレンタインデーというのは何も男にばかりチョコをあげる日ではないのだよ?」

「それはどういうわけだ」

「バレンタインデーには猫にもチョコをあげる習慣があるのだよ?」

「な、なに!?」

「猫にもオスとメスがいるだろう。それに元々バレンタインデーは神に感謝するお祭りだ。神へ感謝すべき気持ちは人も猫も変わらないさ」

「でもたしか兄貴は猫にチョコとかはやっちゃダメだと言ってたぞ!」

「実は最近猫にも食べさせられるチョコが開発されたのだよ」

「そ、そうだったのか……今まであたしなんもやってないぞ……」

来ヶ谷の一言一言にいささか反応している鈴様。何か陰謀の匂いがするが、我々にはそれを推察する術はない。

「とにかく鈴君、早くチョコを買ってくるといい。そこの売店に売っているはずだ」

「わ、わかった!」

そのまま駆け足で去っていく鈴様。こやつ……鈴様に一体何を吹き込んだのだ?」

この時の我々には、明日起こる事態を予測することなどできなかった……。

※ ※ ※

猫の世話をしかなり長いのに、あんな習慣があることを知らなかったなんて恥ずかしくない。

あたしに教えてくれなかった馬鹿兄貴にも後で文句を言ってみよう。

さて、くるがやはそこの売店にあると聞いていたが……どこから探そう。

「あれ、鈴ちゃん?」

「っ!? ……なんだ小毬ちゃんか」

学園を出かけたところで、クラスメートの神北小毬ちゃんとバッタリ出くわした。

「なんかすごく慌ててるけどどうしたの?」

「チョコを買いに行く」

「そっか、明日はバレンタインだからね。よし、じゃあ早くいこー!」

「お……っつて小毬ちゃんも?」

「うん、私もちょうど買いに行くところだから一緒に行く?」

相変わらずなんというか、すごくほわほわしてる。そんな風に言われるとなかなか断りづらい。

「うー……わかった」

「うん!」

そうして小毬ちゃんと一緒に商店街までやってきたが……はてさてどうしたものか。

そもそも普通のチョコと猫用のチョコの比べ方が分からない……くるがやにきいておくんだった。

「あの、小毬ちゃん……」

「ん? なに?」

「あ、いや、やつばなんでもない」

やつぱり知られるのは恥ずかしい。でもそれじゃどうやって見つければいいんだろう。

「それじゃ、ここにしょっか」

そうこうしてる内に小毬ちゃんがある店の前で立ち止まる。

「ううっ……こ、ここか」

「どしたのりんちゃん?」

「い、いや……なんでもない」

そのまま小毬ちゃんについていく形で店に入る。

ここは商店街でも有数の大きいスーパーなだけあって店員もすぐ対応してくれるのだが、人見知りの私にとってはただの重荷にしかない。

「チョコとポッキーと、あとアイスクリームも」

そんな私とは対照的に小毬ちゃんは楽しそうにお菓子選びを続けていた。私も猫用のチョコなるものを懸命に探すが見つからない。どうしよう、これだけの店にないんじゃないに当てがない。

「んーと、これでいいかな。りんちゃんは?」

「え、ああ、私か? 私は……別のチョコにする」

「え?」

「わ、私には私のこだわりのチョコがあるんだ!」

苦しい言い訳だと思うが、今の私に思いつくのはせいぜいこれくらいだった。でもこれじゃすくばれ……。

「そっか、まさに職人魂だね」

……ばれなかった。多分恭介や理樹だったらあっさり見破られていただろう。

「それじゃレジ済ませてくるから外で待って?」

「ああ、わかった」

小毬ちゃんに促されて外に出た私はやつと一息ついた。

それからそれほど経たずに小毬ちゃんは大量のレジ袋を抱えて出てきた。

「お待たせ、それでりんちゃんの欲しいチョコ

「コはどこに売ってるのかな？」
「うーん……」

「どうしよう……やっぱり小毬ちゃんに聞くべきなのか。でも猫を飼ってないこまりちゃんじゃ……」

「……そうだ、もしかしたら行き付けのモンペチの店の親父さんなら知ってるかも。」

「小毬ちゃん、ちょっといききたい場所があるんだがいいか？」

「ん？ いいよ〜」

「小毬ちゃんに付き合ってもらってふたりで行き付けのモンペチ屋へ向かう。」

「そしたら店先に……あった。」

「こ、これか！」

「店先にあったのは猫の顔をかたどったチョコレート。ここにおいてあるならきつとこれだ！」

「おや、お嬢ちゃん、いらつしやい」

「親父さん、これくれ！」

「はいはい、バレンタインなんて作ってみたら案外売れるもんだねえ」

「親父さんからチョコを受け取る。これでミッシェンコンプリートだ！」

「りんちゃん、よかつたね」

「ああ、小毬ちゃん、つき合わせてすまん」

「ううん、ぜんぜんおっけーですよ〜」

「よし、これで明日は大丈夫だ！」

「待っててくれ、皆、明日こそチョコをあげるからな！」

※ ※ ※

「うーん……あ、もう朝か」

「いつも通りの朝。僕、直枝理樹はいつも通りに起きた。さて、いつも通りにルームメイトの井ノ原真人を起こさないと……」

「え!? 真人!？」

「普段なら毎晩筋トレに励んで夜更かししてるせいで2段ベッドの下でまだ寝てるはずの真人がいない。そんな馬鹿な。明日は筋肉でも降ってくるのか!？」

「いやいや、そんなホケしてる場合じゃない。いったいどこに……そうだ、恭介ならしてるかも！」

「僕は兄貴分の恭介を頼りに急いで身支度を整え食堂を目指す。この時間なら恭介もいるだろう。」

「恭介、いる!?」

「おう、理樹。ずいぶんと早いな。」

「僕らがいつも使っている席には恭介がたくさんの箱に囲まれて座っていた。」

「真人がいないんだ、恭介見てない?」

「真人なら……多分バレンタインのチョコを待ち受けているんじゃないか?」

「……あ、今日バレンタインだっけ……」

「それで納得がいった。思えば去年も真人はバレンタインの朝に限って早起きして教室で待ち受けていたっけ。もらえなかつたけど。」

「じゃあ恭介は……」

「ああ、チョコの処理をしているんだ。1か

月前から甘いもの抜いといて正解だったぜ」

「相変わらず恭介は計算高くてそしてモチ。去年もチョコの処理を手伝わされたっけ。」

「そろそろ謙吾も来るだろう、あいつはチョコより剣道だからな」

「俺がどうかしたか?」

「噂をすれば袴姿でもうひとりの友人である宮沢謙吾がやって来た。今日も剣道の素振りを欠かさずやっていたんだろう。」

「ううん、なんでもないよ」

「そうか、それにしても恭介は相変わらずだな」

「モチる男は辛いさ」

「謙吾も席に着き、3人で少し早い朝食を食べ始める。」

「その間にも恭介と謙吾は大勢の女子が入れ替わり立ち代わりチョコをもらっていた。といても謙吾は受け取らないんだけど……」

「そういえば、鈴は?」

「そういや今日は遅いな。あいつは寝坊なんじゃないしな……」

「じゃあ一応様子見に行ってくる?」

「お、悪いな理樹」

「え、恭介行かないの?」

「俺が行ったら女子が群がってくるだろう」

「俺も遠慮させて貰おう」

「分かつたよ、じゃあまた後で」

「僕ひとりで席を立ち、女子寮の方へと向かう。……ってこれじゃ僕がモチないみたいじゃないか。」

「えっと、鈴はと……あ、いた」

「おいお前ら、どうして食わない!」

「どうしたんだろ、猫相手になんか苦戦してるみたいだけど……」

「鈴、どうしたの?」

「ああ理樹か! こいつら私がせっかくチョコを買ってきたのに食べないんだ!」

「……え?」

「みてみると、確かに猫の前に猫の顔の形をしたチョコがおいてある。」

「こいつらもしかしてお腹壊してるのか?」

「いやいやいや、猫にチョコは毒だから!」

「そんなことないぞ! いつもこの店で買った猫が食べても大丈夫なチョコだ!」

「そんなチョコないと思うんだけど……」

「っ!? でもくるがやは猫にもチョコをあげる習慣があるって」

「……来ヶ谷さんか……」

「あの人時々突拍子もない事いうからなあ……」

「結局、鈴に来ヶ谷さんにいくるめられたのだと理解させるのに結構な時間がかかってしまった。」

「うう、やっぱり猫にチョコは毒だったのか……」

「まあ、普通そうだからね……」

「仕方ない、じゃあこのチョコは理樹にやる!」

「え、いいの? じゃあ遠慮なく」

「鈴からチョコを受け取る。これで今年も真

人と同じ目にあうことだけは免れた。」

「それじゃ鈴、早くご飯食べないと遅刻しちゃうよ」

「わかつた! それじゃお前ら、また後でな」

「たくさん猫の鳴き声に見送られながら僕は食堂へと駆けた。」

※ ※ ※

「それじゃ、また昼な」

「チリンと鈴の音を鳴らして恭介に頷く。全くえらい目にあった。」

「あの後急いで朝ごはんをかきこんで何とか遅刻は免れた。」

「教室に入った私達が目にしたのは、なんかすごい暗いオーラに包まれた馬鹿。」

「アイツどうしたんだ」

「毎年のことだよ、放っておいてあげてよ」

「今年も真人は金字塔を打ち立てそうだな」

「なんか声をかけるのはばかられるので無視することにする。」

「ほら、お前ら席に着け。……井ノ原、落ち込むのはいいがクラスの雰囲気まで落ち込ませるのはやめてくれ」

「結局、真人の容態は終始良くなならないまま昼休みを迎えた。」

「真人、ソース取ってくれ」

「…………」

「無言で(というか無意識で)ソースを取って恭介に手渡す。」

「こりゃだいたいぶ重症だな」

「今に始まつたことじゃないんだけどね」

「そういう理樹は私があげたチョコをデザート代わりに頬張っていろあ。」

「まあ明日になれば治るだろう。さて、そろそろいくか!」

「昼飯を終えて教室に戻る。私達は軽く雑談を交わした後それぞれの席についた、その途端だった。」

「お つ!!」

「なになに、どうしたの真人!？」

「り、理樹、み、見ろ、お、俺の机に!!」

「う、うそ……」

「何かと思つて私も見てみる。……なんかきれいな包装がされた箱がおいてある。」

「つ、ついに……ついに……俺にもチョコの神様が舞い降りた つ!!」

「信じられない……真人がチョコ貰うなんて……ほんとに明日筋肉が降ってきそうな気がする」

「んなわけあるか」

「だつてこれはそのくらいの事だよ! ありえないって!」

「まあ確かに私もそう思う。実は内心ではめちゃくちゃ驚いている。」

「こんな馬鹿にチョコを送る奴なんているんだろうか?」

「よっしゃーっ! 早速食うぞ!」

「まさに水を得た魚みたいに生き生きとしな

がら包装紙を剥いでいく真人。それにしても……一体誰がチョコを送ったのか結構気になる。

「よし、ご開ちよ……………う……………」
「ねえ、誰からのさ？ 手紙とかないの？」
「……………」
「おい、どーした真人。嬉しさのあまり昇天したのか？」
「……………」

包装紙を剥ぎ取った瞬間、真人が石になった。あまりの豹変ぶりに箱を覗き見てみると、箱にはたった2文字の言葉が刻まれていた。

『スカ』

「す、スカって……………」
「どれどれ…ああ、確かにスカだな」
理樹と謙吾は呆気にとられている。私は特になんとも思っていないが。
「は、はは……………ははは……………スカ、スカ……………スカ……………」

おお、真人が完全に真っ白になった。
「今時こんなことする人って……………」
「……………あいつしかいないだろう」
謙吾はすぐ犯人の検討がついたようだった。そして彼女は颯爽と現れた。
「やー、真人君。見事に白くなってますネ」

いつもいつも騒がしい存在、三枝葉留佳だ。またこいつの騒ぎにつき合わされるのか。「三枝、真人にスカ入りの箱を送ったのはお前だな？」

「え？ やだなー、私じゃないですよ？」
「お前のさっきの反応からするにこうなっていることを予測していたとしか思えないが？」

「べ、別に予測なんてしてないですよ？」
私から見ても明らかに目が泳いでいる。こいつの仕業だな。
「……………さ……………」
「ん？」
「……………さ……………」

「お、おろ、これはもしかしてはるちんスーパーウルトラピンチ？」
「さああえええぐううさああああ!!」
「ひゃ、ここははるちんスペシャル馬の子も真っ青ダツシユだーっ！」
颯爽と逃げ出した葉留佳を追って、真人は鬼のような形相で廊下へと飛び出していった。

「ふたりとも馬鹿だ」
「そ、そうだね……………」
「全く、騒がしい」
それから十数分して真人が戻ってきたが、すぐ机に突っ伏して上の空で何かつぶやいていたので放っておくことにした。

※ ※ ※

「えええ つ!?!」
「わふ つ、目が回ります !?!」
真人はあまりの喜びのあまり神北と能美の手をつかんだままぐるぐると回り始めた。
「ま、真人！ その辺でやめてあげてっ、ふたりとも目回っちゃうよ！」
「やめろこの馬鹿！」
「うおおおおおっ!!!」

理樹と鈴の静止を意に介さず、真人は嬉し涙を流しつづぐるぐると回り続けていた。つたく、本当にこいつらは面白い。まさしく最高のバカたちだ。

これからも、この騒がしい日常の中で楽しませてもらうぜ！
「よっしゃー、俺も回るぜ！」
「ちょ、ちょっと恭介まで！ やめてよーっ！」
「いやっほう、リトルバスターズ、最高ーっ!!!」

そんな彼らを、影からこっそりと見ているひとりの女子がいた。
「猛獣の井ノ原を止める直枝さん……………美しくないです。やっぱり直枝さんは恭介さんとじゃないと……………あっ、今度は直枝さんが恭介さんを……………ああ……………美しいです……………」

自らの世界で危ない妄想に浸る彼女……………西園美魚は、しばしその場からきらきらとした瞳で一部始終眺めていたのだった……………。

「そりゃ災難だったな」

理樹と鈴に話を聞いて大体の事情を把握した俺、藁恭介だがぶっちゃけ笑いが止まらな

い。

「しかし三枝も面白いことする奴だな」

「騒がしいだけだ」

「は、は……………」

「そんなにチョコが欲しいなら俺のを分けて

やつてもいいぞ？」

大量のチョコからひとつを取り出し真人に

差し出す。しかし、真人は微動だにしない。

「やめてあげてよ恭介。もっと容態が悪くなるから」

「ん、そうか……………」

まあ反応を楽しみたかったが、理樹に釘を

刺されてやめておいた。

確かにこれ以上の精神ダメージは致命傷に

なりかねないかもな。

「あ、いましたー」

「お？」

「皆、探したよー」

寮に向かって歩いていると、後ろから神北

と能美が追いかけてきていた。げっ、なんか

やな予感が……………。

「恭介さん、どうぞなのですー！」

「クーちゃんとおふたりで作ったんだよー」

げ、やっぱりか……………これで何個目か、もう

数えるのも面倒だ。だが、タダより安いもの

はないというしな。



想いの行方は



黒旗蒼鶺
イラスト：晃空
：憂鬱な人が毎日見ている動画がクド関連だ

土曜日は、授業が半日で終わる。明日の日曜日がバレンタインデーということで、学園はなんとなく活気づいていた。

通いの者は、今日で無くては渡せないものもいる。全体としては、今日にチョコレートを渡すものがほとんどだろう。

リトルバスターズの男子は寮住まいなので、明日でもいいだろうと、小穂は考えていた。

他の男子よりは、気を入れたチョコレートを作っていることもある。全員同じものだから、女子にも友チョコで用意していて、そちらは少し趣向の違うものだった。

去年と一番違うのは、兄の為にチョコレートを作ったことだろう。

バス事故の最中に見た夢で、兄の事を思い出した。居たということすらあまいだったので、今までにチョコレートを用意した事はなかった。

今年は何かに力を入れたものを作り、実家に送った。ついでに、父のものも同封した。仏壇に、供えて欲しい。母には昨日の夜に、そふメールを打った。

朝起きたら、届いたら写真をメールで送ると、返信があった。拓也は甘いのが好きだったから、きつと喜ぶとも書いてあった。

やはり、自分の兄だ。何となく嬉しくなり、

小穂は笑顔を浮かべた。

「どうしましたの、神北さん？」

「あ、ううん。なんでもないよ、さーちゃん。佐々美が怪訝な顔を浮かべている。小穂は笑いかけ、部屋の鍵を掛けた。

朝めしを喰い、教室に向かった。

「おはよ、みんな。あつ、恭介さん」

「よう、小穂。今日は早いな」

どちらかと言うと、恭介がこの時間にいる方が珍しいと思った。こちらの考えに気付いたのか、恭介が苦笑を浮かべ、横を見た。視線の先には、真人と鈴。机の上には紙が置かれている。

「おい、毎年のチョコケーキはあたしだろう。真人、お前はクッキーにしろ」

「馬鹿言え、ケーキは日持ちしねえだろ。俺のほうが量は食えるから、美味いまま喰い切れる。その方が勿体無くねえだろ。恭介にやっ

たやつも、その方が喜ぶさ」

「あたしの方が、美味く感じると思うぞ。だからお前は、板チョコでも喰っていろ」

「去年それで、すげえ苦いやつを食わされた

だろーが!? 何とか90%とかの！」

ほとんどペンを奪い合うように、真人たちは口論していた。

「ふええ、理樹くん、ふたりともどうしたの？」

「あつ、小穂さん。毎年のことだよ。ねえ、謙吾」

「バレンタインデーだろう、神北。こいつらは、恭介や俺が貰うチョコレートの分け前を決めているんだ」

「ええええー!?」

鈴が、こちらを向いた。軽く目を見開いている。

「む、どうした。こまりちゃんも欲しいのか。

お菓子好きだからな」

「ええと、そうじゃなくて。りんちゃん、毎年のことって」

「知らんのか、こまりちゃん。明日は、恭介

や謙吾がチョコをたくさん貰う日だぞ」

小穂は言葉に困った。どうも、鈴にとつて

はそういう日であるらしい。

「こいつら、食いきれないほど貰うからな。

俺や鈴で片付けるのを手伝うって訳さ」

「情けない事を堂々と言うな、お前は」

「何だよ、謙吾。それ以外に何の得もねえ日

だぞ」

「全くだな。年に一回、恭介もこんなときく

らいは役に立つ」

恭介が、情けない顔になっている。小穂は

言葉を選びながら、鈴に話しかけた。

「ええとね、りんちゃん。明日は女の子が、

男の子にチョコをあげる日なんだけど」

「そうなのかな？」

逆に困ったような顔で、鈴が聞いてくる。

どうしたら良いのだ、という気になった。

クドリヤフカが、鈴の肩を叩いた。

「鈴さん、明日はばれんたいんでーという日

なのです。簡単に言うと、女性が男性にちょ





これーとを贈る日です。贈る理由はいろいろとありますが」

「そうだったのか、クド？」

「はい。お世話になってる人にあげたり、お友達にあげたり、好きな人に思いを添えて贈ったりもする、女の子の一大いべんこの日なのですっ」

「知らなかったのですか、鈴さん？」

美魚がいつもの眠たそうな目で言ってくる。鈴が、ひとつ頷いた。

「鈴ちゃん、恭介さんが何で毎年チョコレートもらえるのか、気にしなかったんですかネ」

「葉留佳。むう、実はちょっとおかしいなと思っただけ」

「いやいやいや、嘘でしょ。毎年、真人とチョコレート奪い合っただけだし」

「うっさいわっ。失礼なことを言うな、ほけっ」

「待て、鈴くん。そうすると君は、バレンタインデーにチョコを贈ったことが無いのかね？」

「普通は無いだろ」

「いやいやいや……。毎年、恭介や謙吾から余りを奪っていたよネ」

「さっきから何だ、お前は。みんなだって無いよな？」

誰も頷かなかった。ちよつと、鈴がうろたえたようになった。

「ちなみに、女子から貰ったことが無いものはいるか？」

手を上げたのは、真人だけだ。よく分かっていないのか、何故か堂々としている。

「お前ら、おかしいぞ。何で、人にチョコをやったりするんだ」

「逆切れか、おい」

「うっさい、謙吾。なんでだ、くるがや？」

「ふむ、それはだな。女性にチョコレートを贈られたら、1か月後に3倍にして返さなければならぬと決まっているからだ。それは、贈るだろう。先行投資だな」

「ええっ、ゆいちゃん!？」

「にやにや……」

「マジかよ……。それじゃあ、俺は今まで貰ったことがなくて正解ってことじゃねえか」

「そこまで行くと、逆に切ないぞ、真人少年」

鈴と真人が、そろって頭を捻っている。ここまで理解されない理由というのが、小毬には見当もつかなかった。

「つまり、あれか。くちやくちやお得だから、みんなやっているのか？」

「まあ、そういう一面もあるということだよ。ちよつと、あまり変な事を吹き込まないでよ。来ヶ谷さんの冗談だからね、鈴」

来ヶ谷を理樹が暗める。それにも気付かず、鈴は何かを考え続けた。

「恭介や謙吾も、ちゃんと返していたのか？」

ふたりがそろって頷いた。それを見て、鈴が大きく目を見開いた。

「理樹もか。3倍か？」

「それは返したよ。まあ、もらったのは義理

チョコくらいだし、3倍とはいかないけど」

「何だよ、理樹。いつ貰ったんだよ、そんなの」

「あれ。去年クラスの女子の何人かが、ひとまとめで配ってただけだ」

「そうだったかな」

「何か、追求しない方が良いという気もしますが」

「そうだねー。真人くんが、何か可哀想なことになるそうですしネ」

美魚と葉留佳が、真人に哀れみの目を向けた。

そのうちに、クドリヤフカがにこにこしながら、鈴の腕に抱きついた。

「鈴さん、では今年には誰かにあげては如何でしょうーか。普段リキたちにお世話になってるので、そろそろ、そろしても宜しいと思います。私も、皆さんにぶれんとするのですー」

「ホントか。お前らもか」

「まあ、一応用意はしてあります」

「一応って、みおちん」

「ちなみに私は、今日買いに行く予定だ。一緒に来るかね、鈴くん」

鈴が腕を組んで、唸り始めた。本当に、考えてもいなかったらしい。

「むう。確かにお得な話だしな」

「あの、りんちゃん。それは一度忘れた方が」

「でもあたしはやったことないから、どうしたら良いのかよく分からん。教えてくれ」

鈴が困った顔で、全員顔を見渡した。

「こういうところでは、意外なほど素直に

「まあ、よっぽど嬉しかったんだろうねえ」

鈴の言葉に、理樹が苦笑いを浮かべた。そして、他のものも似たような顔をしている。

しばらくして、スピーカーから声が聞こえてきた。

『あー、あー。こちら裏恭介。全校の女子生徒にお知らせだ。バレンタインデーに、俺にチョコレートをやるうと思っていたら、謝っておく』

リトルバスターズの全員が、顔を見合わせ

『今日と明日、俺は誰からもチョコレートは受け取らない。ひとり、除いてだ。そのひとりのチョコレートだけを受け取る。準備しててくれた子がいたら、本当にすまん。だが、俺にとっては大切なことだ。わかってくれ。では、アデュー!』

放送が、終わった。廊下から、何か悲鳴や怒声のようなものが聞こえてくる。

しばらくの間、全員が無言だった。

「恭介以外がやったら、外した内容だったけどねえ……」

「良かったな、鈴くん。これ以上なく、喜んでもらえたようだ。5倍はいけるぞ」

「ほわあつ、ゆいちゃん、いつの間に!？」

「速攻で風紀委員に囲まれそうになったのでな。さっさと脱出してきた」

「恭介君は、姉御?」

「さあな。踊り上がったって喜んでるところを、捕らえられたのではないかな」



「いや、考えていなかったが」

「じゃあ、誰にあげるか決めて、その人が喜ぶようにしたら良いんじゃないかな?」

「いいアイデアだぞ、コマリマックス。では鈴くん、誰にやるか決めてみようか」

理樹だろう、と小毬は思った。

「ええと、りんちゃん。だれかあげたい人いるの?」

「いや、考えていなかったが」

「じゃあ、誰にあげるか決めて、その人が喜ぶようにしたら良いんじゃないかな?」

「いいアイデアだぞ、コマリマックス。では鈴くん、誰にやるか決めてみようか」

理樹だろう、と小毬は思った。



「やっぱり、チョコをやるのを止めたくなくなってきたぞ」

「いや、それは。恭介が見てられないほど落ち込むから、贈ってあげてよ……」

「まあ良いではないか、鈴くん。それより、私にも初の友チョコをくれると嬉しいが。恭介氏のついでということどうかね」

「来ヶ谷、お前はそれが狙いだっただけだ。勿論だ。鈴くんの初めてを貰うなど、言葉だけで心踊るものがある。ま、友チョコで我慢はするがな。鈴くんが自らをチョコレートでコーティングしてくれる程度で良い」

「いやいやいや……」

来ヶ谷がにやにやと始めた。鈴は意味が分からなかったのか、こちらに目を向けてきただけである。

「うーむ。こまりちゃんは、あたしがチョコあげるって言ったら、欲しいか?」

「あ、うん。それに、理樹くんたちにもあげれば良いと思うよ」

「そうか。まあ、ついでだしな。おい、お前ら、ついでにやるぞ」

理樹と謙吾が、苦笑しながら頷いた。真人だけは、黙っている。

「あれ、真人くんはいらなの?」

「返さなきゃならねえんだろ。なら、いらねえ。返したくても、金がねえし」

「こまでくると、いつそ哀れに思えるな」
「とりあえず、真人くん、サイテー。あたしも義理チョコ、あげるの止めとこーっと」

な声をあげた。

「あら、さすがは男の子ねえ。かなちゃんも効率が良くなって、喜ぶわね」

「この筋肉には、軽いもんさ」

「調子に乗ってるんじゃないわよ。あと、先輩には敬語を使いなさいよ」

「細かいやつだな。おい、次はどれだ?」
文句を言いながらも、真人はてきぱきと働いている。馴れている、という感じだ。

リトルバスターズで風紀委員にマークされているのは、真人と葉留佳だった。特に真人は、立っているだけで服装違反になるから、かなり佳奈多が面倒をみる羽目になっている。

大まかには、片付いた。恭介も黙って仕事を続けた。

「そろそろ、休憩にしましょうか。かなちゃん、お茶を淹れてくれるかしら。井ノ原君は、悪いけどその机をこっちに持ってきてくれる?」

「あーちゃん先輩。もうすぐ終わりなんですから」

「いやあ、あと1時間は掛かるわよ、これ」
そう言いながら、机を拭き、茶器を並べ始める。佳奈多が、小さく息を吐いた。

「あ、そっだ。昨日の義理チョコの余りがあったわね。お茶請けには良いかも」

「いらん。俺は、今日は誰のチョコも貰わん」
「こいつ、昨日から何も食ってねえんだぜ」

「あらあ、それは気合が入っているわねー。」

葉留佳がからかい混じりに、真人にそう言った。

朝から、なかなか賑やかだ。それも、意外な展開になったものだ、と、小穂は思った。

もう、2時を過ぎていた。

今日は鈴が、チョコレートをくれると言う。それだけは、予想していなかった。恭介にとっても、バレンタインデーは、鈴と真人に菓子分けてやる日になっていた。

恭介にする。そう言われた瞬間、頭が真っ白になった。

気付いたときには、風紀委員に捕まっていたのだった。半分泣きながら、踊り上がっていらしたらしい。後悔など、無い。しかし、焦りはあった。

鈴を待たせているかもしれない。そう思うと、たまらない気分が恭介はなった。

「おい、二木。そろそろ終わりでいいよな?」
「いい加減にしてください、棗先輩。貴方1分ごとにそれを聞いているでしょう。いちいち手を止めるから、効率が悪くなるんです。さっさと帰りましたら、黙ってファイリングする手を動かしてください」

佳奈多が鼻を鳴らし、そう吐き捨てた。

寮長室。部屋にいるのは佳奈多と前寮長。そして服装違反でまた捕まった真人だった。

佳奈多は寮長になったが、バス事故のせいじゃあ井ノ原くんにふたり分ね」
「マジか。それは、ただか?」
前寮長が、可笑しそうに笑った。真人も、はつきりと言うものだ。そう思った。

「別に良いわよ。どうせホワイトデーには、学園には居ないだろうし」
机の上に、チョコレートが入った袋が広げられた。黒と白の糸が、織ったように絡み合っている。そして、何ともいえない良い香りを放っていた。

「これ、どうやって作ったんですか、あーちゃん先輩?」
「ただ溶かして、固めなおしただけよ。義理で皆に配るものだしねえ」
「でも、こんな風に出るものですか。それに、この香りは?」

「ビターとミルクチョコレートを溶かして、冷やしたシロップの中に絞り出して、編んだだけよ。香りは、シロップに混ぜたりキユーールね。ちよつと濃い目のシロップで、柔らかいチョコレートを固めるようにするのがコツかしら」

「よくわからねえが、何か凄えな。なんて名前なんだ、これ」
「さあ。もしかしたら名前はあるかも知れないけど」

佳奈多が、絶句している。前寮長がにこりと笑い、ふたりに勧めた。真人が、チョコを口に放り込む。佳奈多も、それに続いた。

ふたりが、目を見開いた。

で引継ぎが遅れている。とにかく作業だけは引き継いだが、それも前寮長と一緒に仕事をしような形になっていた。

もうすぐ、前寮長も卒業になる。

後回しになっていた、私物の整理などがかなり残っていた。それと一緒に、佳奈多が使いやすいように模様替えをするという。罰則として、その手伝いをさせられていた。

佳奈多は、机を移動させていた真人に向かって、次の仕事を命じていた。

「井ノ原真人、貴方は中のファイルを出してから、その棚をこっちに持ってきて」
「くそ、こき使いやがって。大体、何で俺まで。せつかくの日晒だつてのに」

「貴方は普通に、服装違反の罰よ」
「お前は寮長だろ。なんで風紀委員に捕まった罰を、仕切ってるんだよ」

「こつちだつて、迷惑しているのよ。貴方たちの抑えがきかないからって、風紀委員長から処分を回されるほうの身にもなつて欲しいわね。いつも愚痴に付き合われるし」
ぶつぶつと、佳奈多が文句を言ってくる。

前寮長が笑い声を上げた。
「それは、かなちゃんも同じようなものだったから、おあいこよ」

佳奈多が顔を赤らめた。風紀委員長だったときには、やはり愚痴を言っていたのだろう。真人が棚を一気に持ち上げ、歩き出した。相当多数のファイルが詰められているが、軽々と持ち上げている。前寮長が、感心したように

「お、おい、二木。お前、甘いもの嫌いだったよな。これは俺が」
「駄目よ。これは譲れないわ。いやむしろ、棗先輩の分を寄越しなさい。葉留佳にも、食べさせてあげないと」

佳奈多と真人が、言いあい始めた。そんなに、美味しいのか。いや、自分には鈴がくれるチョコレートが、待っている。恭介は、必死に耐えた。空腹が、急に気になり始めた。ふたりが食い終わるまでの間、前寮長は目を細めて、その様子を見ていた。

掃除が再開された。やはり1時間ほどで、大体終わった。あとは、軽い掃除だけだ。
「結構、物が出てきたな。あんた、これ持っていけるのか?」

「そうねえ、どうしようかしらねえ」
佳奈多が声を掛けられたのにも気付かず、私物の入ったダンボールを見ていた。一抱えはある大きなものだが、ぎっしりと物が詰まっている。

「おい、どうしたんだよ、二木?」
「あ、ええ。あーちゃん先輩、これは台車で運びましょうか。ご実家に送られるなら、ここに置いておいても構いませんが」

「片付けたばかりで、それは悪いわ。部屋に運ぶからいいわよ」
「そう、ですか」

そう言つて、佳奈多が部屋を見回した。何となく声を掛けにくい雰囲気放っている。

「かなちゃん、どうしたの?」





「なんでもないですよ、あーちゃん先輩」
佳奈多が、困ったように笑いかけ、少しうつむいた。

少しの間、部屋が静かになった。
「仕方ねえな。これは俺が運んでおくぞ」
「ちよつと、何を」

「この筋肉には、軽いもんだ。それにいつまでも置いておいても、ろくなことねえからな」
そう言うと、真人がダンボールを持ち上げ、扉に手を掛けた。

「外で待っているからな。早く来いよ」
「ちよつと、待ちなさいよっ」

佳奈多が言うのも聞かず、真人はそのまま部屋を出て行った。

前寮長に顔を寄せ、恭介はほとんど唇を動かさずに話しかけた

「珍しいな。あいつが気を使うなんて」
「そうね。最近かなちゃんと一緒にいることが多かったし」

にこりと、笑いかけてくる。どこか、悪戯っぽい笑顔だった。

「棗くん、掃除は私たちでやるから、もう帰って良いわよ」

恭介はひとつ頷き、そのまま部屋を出た。うつむいたままの佳奈多は、何も言っていない。

鈴たちは、食堂にいるはずだった。

以前ホットケーキを皆で食ったことがある。今回は、鈴がクレープを焼くという趣向だった。チョコレートソースがかかってい

る。一度見た人間は大抵覚えられないという自信が、恭介にはあった。だから、謙吾と付き合っているのは、大体わかる。今、謙吾の前で、佐々美と同じような箱を持っている女生徒に見覚えは無い。

女生徒はふたり。顔を真っ赤にしているひとりが口を開く。もうひとりが応援するような形なのだ、恭介は何となく考えた。
「あの、宮沢くん。これを。その、宮沢くんがチョコをあまり貰わない人だって知っているんだけど、あの」

「言っておくけど、宮沢くん、この娘はね」
もうひとりの女生徒は、ほとんど睨みつけるようにしていた。断ったら、怒鳴り出しそんな雰囲気放っている。
「くれるなら、ありがたく貰おう」

あつさり、謙吾が箱を受け取った。やった方は、口をばくばくとさせている。
「確か、君は去年も渡してくれようとしただろう」

「えっ、覚えていてくれたの？」
「その時は、済まなかったな。顔と名前が分かっている者からしか、受け取らないようにしているんだ、俺は」

「それは。それより、私のことを知って」
女生徒とクラスを言った。もうひとりまで、驚いたような顔をしている。
「勝手な理由で断っているわけだからな。や

ば、それなりに格好がつくということだろう。真人が、渡り廊下の階段に座っていた。

「よう、真人。珍しく気を利かせたな。今頃は、ふたりに積もる話でもしているかな」
「まあな。ま、今回だけは、あいつの気持ち分からないでもねえしよ」
「そうなのか？」

「お前、来週には俺たちに部屋の片付けの手伝いを頼むって、言っていたじゃねえか」
「そういうことか」

「理樹なんか、片付けの最中に泣くかもしれないな。謙吾もかもな」
「お前は？」

「俺が泣くわけねーだろ。馬鹿言ってるんで、さっさと行きやがれ。鈴が待っているだろ」
恭介は真人の横を通りすぎた。

「おい、恭介」
「どうした、真人」
「卒業式の後があるから、集まるのが最後ってわけでもねえだろうけどよ。まあ、楽しんでこいよ。後から、顔出す」

「お前、悪いものでも喰ったのか。どうしたんだ、今日は？」
「けっ」

にやりと笑いを交わすと、そのまま恭介は食堂に向かった。

鈴が、待っている。もしかしたら、チョコレートしてくれると言ったのは、佳奈多と同じ気持ちがあったからかもしれない。そう思ってみたが、聞き出そうとは考えなかった。

はり、何となく目に入るのさ。今年もくれるとは、思っていないかった
「いや、あの」
「ありがとう。素直に、嬉しい」

謙吾が、白い歯を見せて笑った。あまり、やらないことだ。言葉どおりに嬉しいのだと、恭介は思った。
「そんな。こちらこそ、あの、ゴメンナサイ」
女生徒が、ぱつと頭を下げ、廊下の向こうに駆けていった。
「やるじゃん、宮沢くん」

もうひとりが、嬉しそうにそう言って、その後を追いかけた。
謙吾は穏やかな笑みを浮かべている。しばらくしてから、その場を去っていった。
恭介は、大きく息を吐き出した。佐々美もほとんど同じ様になっている。

「あいつが、もてるわけだよなあ」
「宮沢さま、貴方という方は、カッコ良すぎますわああ……」
泣きそうな声で佐々美が呟く。喜んでいるのか、悲しんでいるのかは分からなかった。

「笹瀬川、お前は行かなくて良いのか？」
「うう……。宮沢さまああ……」
「あの娘に、古式。謙吾はこれで、本命チョコは最低ふたつか」

「わ、わたくしだって。ほ、本命で用意しておりますわっ」
「渡さないなら、義理も本命も無いぞ」
「わかっておりますわっ。で、では、行きま

楽しめば良い。要するに、今日は祭りなのだ。

3時半になっている。開始は3時だが、今のところ、呼び出しは掛かっていない。北校舎。廊下を歩いていると、謙吾が居た。何人かの女生徒と話をしている。

そして、教室の影から、それを見ていたものも居た。佐々美。何となくその後ろにつき、声を掛けた。

佐々美が仰け反った。そして、睨みつけてくる。
「なんですよ、あなたはっ」

小さな声だが、語調は強い。器用な事をすると、恭介は思った。
「こっちの台詞だがな、それは。謙吾に何か用なのか？」

佐々美が横を向いた。手には、きれいに包装された箱が握られている。
「何だ、チョコを渡すつもりだったのか。さっさとやってくれれば良いじゃないか」
「簡単に言わないで下さいなっ」

「別に、難しいことでもないと思うがなあ。お前は顔と名前を覚えられているはずだから、普通に受け取ると思うぞ」
「知っていますわよ」

謙吾は、山のようにチョコレートを貰う男だった。剣道部で対外試合にも顔を出すせい、他校からも女生徒がくるほどだ。

返すにも手間が掛かるという理由で、顔と名前を知っているものだけから受け取る。そ

すわよ！」
そう言いながらも、佐々美の足は全く動かない。
待っていても、しょうがない。恭介は教室の陰から出て、再び廊下を進んでいった。

一度だけ振り返ると、佐々美はまだ固まっていた。
「良かったら、謙吾を呼んできてやろうか？」
佐々美の顔が、更に赤く染まった。小さく、頷く。ほそりと、呟くような声をあげた。
「そうして頂いても、よろしくてよ」

「不合格」
「えっ。ぜつ、是非お願いしますわ、棗先輩」
「案外、素直だな。俺も忙しいから、引っ張ってまでは無理だぜ」

恭介は苦笑いを浮かべた。それでも佐々美は、安堵した顔になった。
食堂で、声を掛ければいだろう。ここからは、往復しても五分は掛からない。来るかは、微妙だった。謙吾は佐々美を苦手としてるところがある。

少し早足で進んだ。食堂の前には、理樹と謙吾が居る。何故か、扉は閉ざされていた。
「どうした、おい？」

「あつ、恭介。ちよつと、鈴がまた上手いかないみたいで。ちよつと待っているって」
「午前中から、やっていたはずなのだがなあ。クレープというのは、そんなに難しいものだったか」
「まあ、仕方ないよ。もともと、料理とか得





意じゃないしねえ」

「どれくらいかきそうなんだ？」

「小穂さんは、30分って言うていたけど」

「まあここに居ても、仕方ないだろう。一旦解散にして、30分後に集合にするか」

ただ待っているというのが、恭介は苦手だった。何かしたいという気に、どうしてもなる。

「僕は残るよ。早まるようだったら、連絡するし」

「そうか。俺はちよつと寮に戻るかな。謙吾、

暇ならさつきチョコを買っていた場所に戻ってくれ。お前を呼んでくれと、頼まれた」

「見ていたのか、おい」

「通りがかりだ。廊下の真ん中でやっていて、怒ることもないだろう」

「まあ、いい。それで、相手は誰だ」

「お前が顔と名前を知っている奴だよ、謙吾」

謙吾がひとつ鼻を鳴らした。からかわれていると思つたのかもしれない。それでも、黙って佐々美がいるであろう方向に、歩いていった。

恭介も、その場を離れた。

気持ちには、浮き立っていた。ただ待つのが嫌なだけで、待つ時間にも楽しみがある。

寒々とした空気の中、薄明るい空に、星が灯り始めている。

て、鈴が口を開いたのは、少し経ってからだ。

わかつた。お前はそういう奴だ。だから、お前が貰うのは、そのひとつだけだ。あたしもやらんし、他の奴からも受け取つたら、めつ、だぞ。

理樹は、まるで鈴が腹を立てていないことに直ぐに気付いた。他の者も、そうだろう。

恭介は鈴に謝った後、そのケーキを今年はひとりで喰うことにすると言った。腹が減っていたのだろうが、その場では食わず、茶を飲んで空腹を紛らわせていた。

恭介がそういう男で、嬉しかった。鈴もそれを、わかつてやれる様になつたのだ。

「今日は、偉かつたね」

「ふん。まあ、あのチョコレートケーキはくちやくちや美味いからな。あたしがやらなくても、いいだろう。それに、去年までは大半を、あたしと真人で食っていたからな」

「気を使うねえ、それは。恭介にお返しだけをさせていたわけだし」

「うっさい。別に、そんなつもりじゃない。あたしはな」

「わかつているよ、鈴」

理樹は、にこりと笑つた。鈴が顔を逸らして、黙り込む。

鈴が人の気持ちを分かるようになっていく。理樹にはそれが、本当に嬉しいのだった。「そう言えば、真人もケーキが食べられなくて、残念だったかな」

鈴が黙つたままだったので、話題を変えた。

理樹は、鈴を寮の前まで送ることにした。後片付けで少しだけ遅くなつたのである。

真人たちは、先に寮に帰っているだろう。そうしてもらつたのだ。手伝つたのは理樹だけで、リーダーというのは、そういうものだと理樹は考えていた。

鈴は疲れきつたような顔で、ふらふらと歩いている。

「鈴、今日はお疲れ様」

「くちやくちや疲れた。もう、二度とやらんぞ……」

「そんなこと言わないでよ。みんな、喜んでいたじゃない」

練習で、かなり失敗したらしい。始まつたときには、既に疲れが見えていたのだ。

寮まで遠いわけではない。直ぐに、女子寮の玄関前に辿り着いた。

「今日はありがとう。クレープ、美味しかったよ」

「それは、良かったな」

どうでも良さそうに呟いた後、急に足を止めて、鈴がこちらを振り返つた。

「そう言えば、理樹。お前、皆からもチョコを買つたのか？」

「あ、うん。昨日はクラスの女子が合同で義理チョコをくれて、今日はリトルバスターズと、佳奈多さんからも」

後で、真人と佳奈多と前寮長もやってきた。その時に、佳奈多からチョコを買つたのだ。

「いつも葉留佳さんがお世話になつているか」

「まあ、あいつも今年はクドやこまりちゃん達から貰つていたから、良いだろう。かなたが何で、真人にクレープを作つてやったのか、訳が分からんが」

「なんか、寮長さんがけしかけていたような感じはあるけど」

本当は佳奈多が寮長だったが、理樹や鈴は前寮長を、まだ寮長と呼んでいる。

「うむ。寮長は凄かつたな。何かスパイスとか入れるとか、かなたに言つていた。あたしも食わせてもらつたが、あれは美味かつたな」

「そうなの。さすが、元家庭科部の部長たよねえ」

「けど、かなたもよほど、嫌だつたんだろう。顔を真っ赤にして怒つてたからな」

「いや、それは」

鈴がひとりで頷いた後、こちらを見て、目を細めた。

「まあ、あたしも楽しかつたし、今日は良い日だったのかもな。こまりちゃん達にも、いろいろ手伝つて貰つたけど、何とかなつたし。それと、寮長もか」

「寮長さんも卒業だから、寂しくなるね」

鈴の髪飾りのすずが、ちりんと鳴つた。

「じゃあ、おやすみ。明日は、寝過ごして遅刻しないでね」

「子供か、あたしは」

理樹は、踵を返そうとした。しかし、鈴がこちらを見ていることに気がつき、足を止めた。

らつて」

「何か、あれだ。お歳暮みたいだな」

「まあ、そうだねえ。だから、恭介にも用意していたらしいけど」

「ふん。あいつが貰うのは、ひとつだけだからな」

鈴が鼻を鳴らした。どこか面白く無さそうな口調である。

理樹はまた、嬉しいという気になつていた。

鈴にも、恭介にもだ。恭介は、鈴からのチョコレートを受け取らなかつた。

開始前の待ち時間に、別の女生徒から受け取つていた。鈴と真人が、毎年のように奪い合つているチョコレートのケーキである。中学の頃から、ずっと続いているもので、理樹も食つたことがあつた。毎年、少しずつ趣向が変わり、ひとりが奪い合うのもわかる程に美味い。実は、理樹も密かに楽しみにしていたのだつた。

恭介の放送を聞いて、なお贈る。そこにあつた想いを読み取るのは、難しくない。そして、ずっと続いていた想いでもあつた。

恭介が自ら語つたことだつた。それを聞く鈴の顔は、強張つていた。

鈴は一生懸命準備をしていた。恭介に贈るためにだ。多分、来年はこういうことはもう無いという想いがあつたのだろう。それは、恭介にも分かっていたはずだ。

額に汗を浮かべ、頭を垂れる恭介に向かつ

「どうしたの？」

「いや、大した事じゃないんだが。理樹、お前、今日は本当に楽しかつたのか」

「えっ」

「時々、誰かを探している様な顔していたからな。チョコを貰いたい奴が他に居たのか？」

「それは」

自分でも不思議なほど、慌てっていると、理樹は思つた。そんなことは無いという言葉が、どうしても出てこない。鈴が、じつとこちらを見ている。

「お前、あの事故の後から、ずっとそんな感じだから気になつただけだ。あたしの勘違いなら、別に良い。おやすみ」

そう言つて、鈴は寮の中に戻つていった。理樹は自室に戻る間、鈴の言葉をずっと考えていた。

確かに、誰か、何かが欠けていると感覚を覚えることはあつたと思う。ただ、それを表に出していたとは気付かなかつた。それに、頻繁にあることではない。

部屋に戻ると、真人がトレーニングをしていた。

「ふっ、ふっ、筋肉、筋肉……。おつ、理樹。遅かつたじゃねえか」

「あ、うん。ちよつと手間取つちやつた」

何故か真人の顔を見ることが出来る、顔を背けた。机。何か、包みが置いてある。

「あれ、何これ？」

「えっ、お前のだろ。戻つてきたら、机の上

